特 71
856

家庭小説

捨てたる戀

草の人作

東京 大學館發行

258

301756000-8
特71-856

家庭小説 捨てたる戀

草の人／著

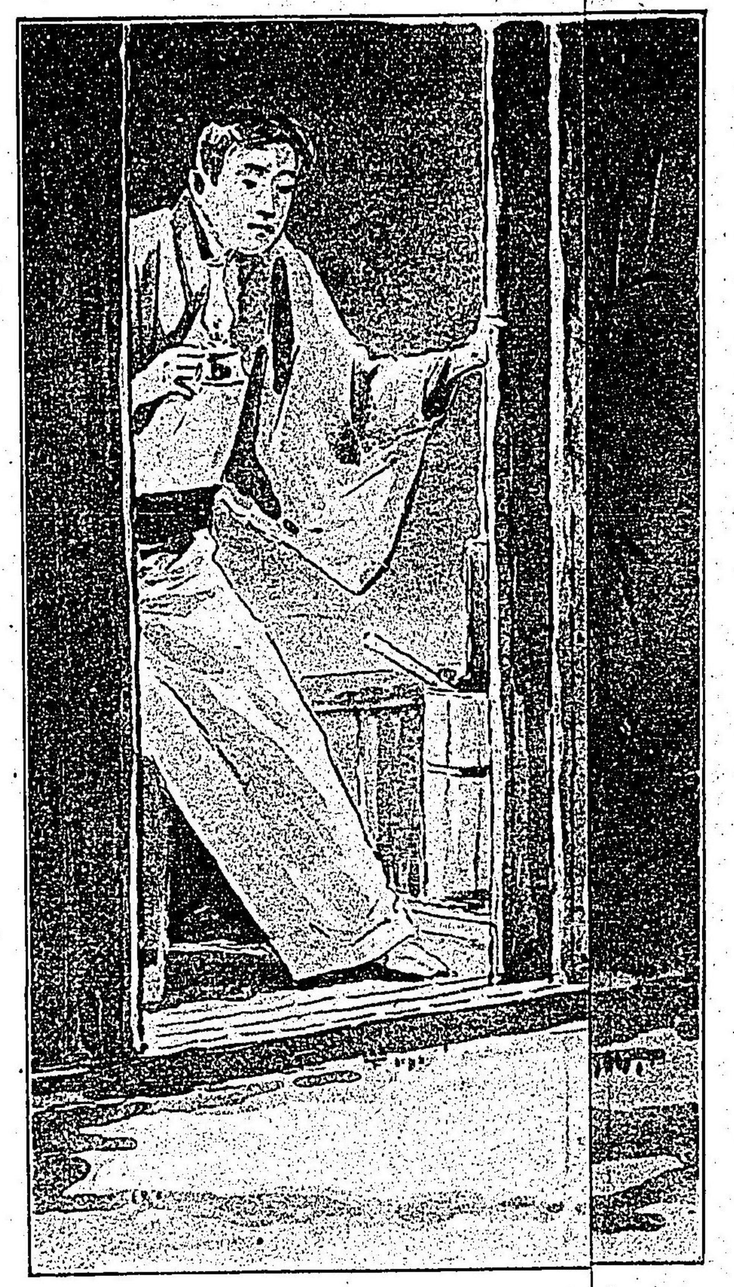
M40
DBQ- 54

はしがき

夫婦となりながら、前に契りたる男を忘れかねて、眞實なる夫の眼を偷みて媾曳せしやうの罪を免しかね、泣いてやさしき夫をも離緣せり。

しかるに女はある情あつき男に再緣して後、そのやさしかりし前の夫を慕ふの念起り屢々現在

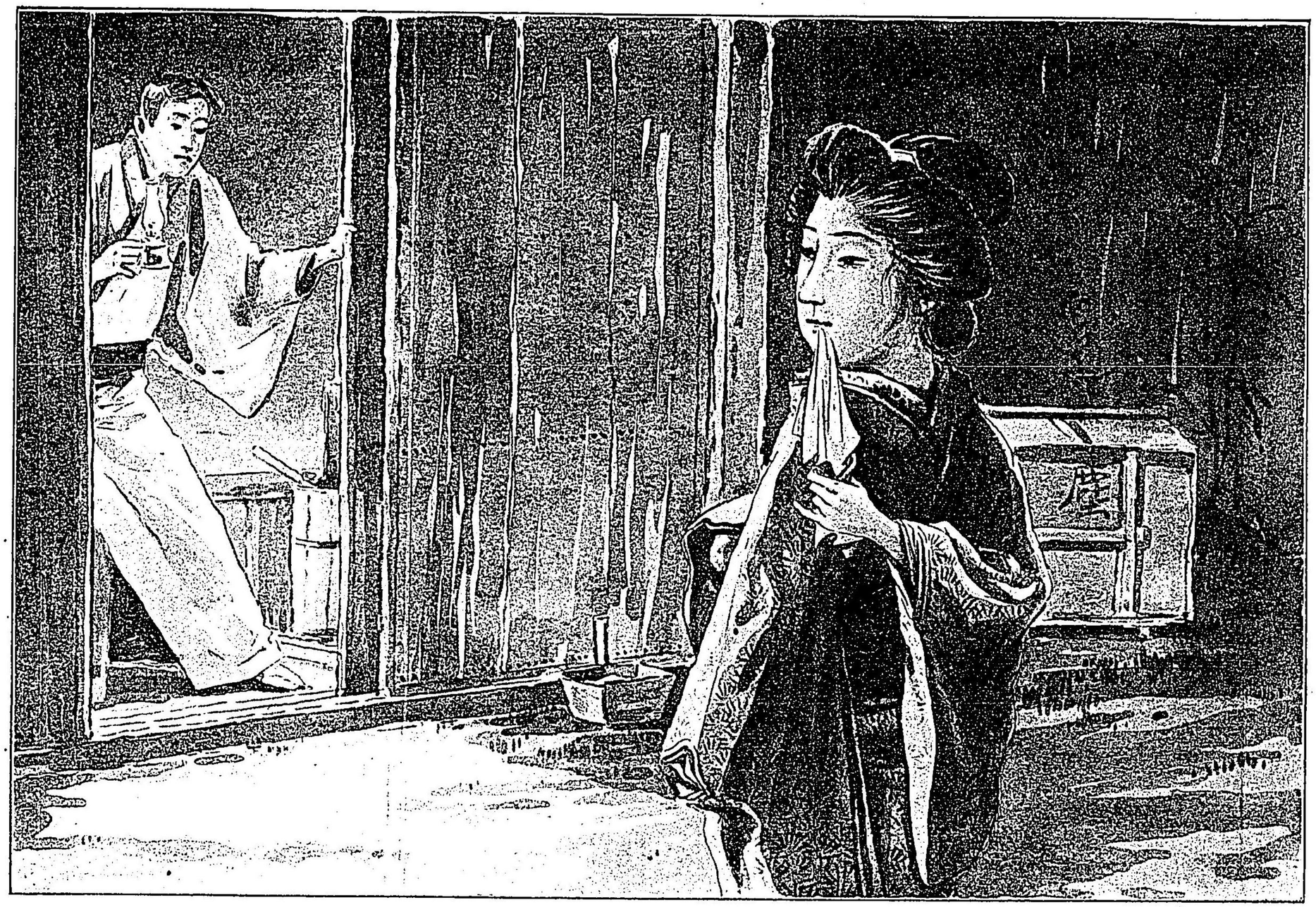
明治
40 6 26
内交



の夫を欺きて外出せしが遂にやさしき夫に會ふ能はず、却つて現在の夫の嫉妬の刄を受けては かなき最期を遂げたる經歷を綴りたるものにて、女性の研究として尤も味はふ可き作物なると共に、緻密なる筆致は女性の不思議なる性格を解剖して餘蘊なし。

四十年六月

雨聲閑人



特71
856

家庭小説

捨てたる戀

草の人作

(其一)

自分は、四時半の鈴が消魂しく室々の扉を通して鳴り響くと、急いで机上を整理けて、平常になく、其處を見捨てるやうに、飜譯課の室を出て、庶務、會計、宮内、軍事、さては紅烙つた暖爐のある小使室を通り抜けて、つと表へ立ち出た。

春とは名のみ、未だ如月半の弱々しい、それも今西へ落かゝる夕日の光が、夢のやうに上面を流れて居る、樹木の繁叢が、唐如に搖いで、ひよいと出た自分を、颯とからび切つた汚風が來て用捨なく見舞ふ。と、インバネスの袖が葛葉返へし。火急

て取り押えた自分はつ〳〵と二歩三歩小刻に門口の方へ、急がうとして、今朝出がけに磨いて呉れた靴を氣にして、ふと瞳を下すと、其時はつと思うて慄然とした。

――風は又たひゆうと帽子に打着かつた。

『あゝ、お密は刺殺されたのだ！』

一体、今日は月の三十六日會計日で、二十八圓の月給を受取つた自分は、何故か、今日他の同僚三人共欠勤したのを幸ひ、一番、今月は洋食に捨てる金で、歸途、小川町で電車を降りて、信盛堂へ立寄つて、春枝の玩具を買入れて行つて呉れやう。すると妻も春枝も必つと喜ばう。と言ふ豫算を、整然と實は頭腦へ疊み込んで、ポケットを押へぬ許りにして駈出して來たのであるが、不圖今朝の新聞紙の出來事を思ひ浮べると、我知らず其處へ立ち止つて外套から新聞紙を取り擴げるのであつた。

お密の加害者は、彼女の現在の夫石渡金之助(三十八)で、目下街鐵の土方工夫、酒は飲むが、仕事に極忠實なとか言ふのであつた。で仕事に忠實な丈けに、彼はお

密を非常に愛し、其愛し過ぎる程なのが、遂ひに發して、嫉妬となり、猜疑となり、無慘、這般の出來事に至らしめたので。又た其際のであるから、彼はお密を刺殺すと、直ぐ其足で自訴したのであつた。

彼は愛し、同情すべきであるが、自分は一層其お密の心情を哀れに且悲しく思はざるを得ない。實は深かい理由があるのだ！

世の中には待ち設けぬことが屢々起る、人の秘密と運命は分明らないものだ。あれ丈け詳細と書記した新聞紙さへお密の秘密を知らなかつた、又たお密自身は、恐らく自分の運命が斯くならうとは期して居なかつただらう。――そして自分は、お密が斯く迄立派な心根を持つて居らうとは、少しも知らなかつた。

彼女は、檢視せられた時、懷に一通の手紙を所持つて居た。それは己の先夫に宛てた手紙で、極簡單に左の如く書記されてあつた。

妾こと、貴下樣に由なき疑ひを蒙り、其際直樣緣を相切り申候が、後にて

熟考仕候に、誠に口惜しく、其後一度はれ面見を得、是非に心の底を打ち明け申べく存居候に、生憎御宿代にて何れへ引越とも相分らず、今はとて泣く〳〵便なき浮世に暮らし侍り候、されど妾てと、最早や貴下様との御縁はなきものと諦め申べく候故、この寄邊なき身の何時かは死に果て候節は、何卒此手紙にてありし昔の事共、奇麗薩張とした妾の心根の程を、お認め被遊度く一向にお願申上候。

涙ながらに　密　か

わが戀ひしき先夫の君。お許へ

自分は、此文句を讀み返へす毎に、鐵火を浴びたかのやうで、手先はぶる〳〵と震ひ、舌は硬ばる、恐らく此瞬間我顔は、蒼白めてるだらう。

折柄颯と又た風が砂塵を見舞うたが、

『社頭さん』。

言つて、其風が持つて來たかのやうに、其處へ立ち現はれた者がある。――手には矢張り自分と同樣に新聞紙を以て。

『は』。

自分は、無三てに返辭した。

『へい、夜前は、遂ひ其處の堀邊で以つて、非常な椿事が御座いましたそうで。私達近くに居て些ども存じませんでしたが――』。

『あ、そう』。

巧みに斯うは出たが、實は自分少なからずぎまぎした。と、言ふのは、此小使、自分が以前此參謀本部へ勤て居た時から、ずつと引續いて居るので、若しや自分の以前の事共を？　――と言ふ考えが、電のやうに頭腦へひらめいたからだ。

然し自分は、小使が他の片手に木札の纏附いた門鍵を持つて居るのに氣着いた。きつと瞳上げると、もう門の瓦斯燈へは星のやうな火が來て居る。

『や、皆もう歸つたのかね？』

自分は、又た驚いて、斯う訊くと、

『へい、もう先程何誰も何でした、お殘りになつて居らつしやるのは、大抵宿直の遠藤さん桝木さん許りで御座いませうよ。今日は、本山大佐殿も早くお歸へりになりましたで』。

『そうか、今、汝、門を鎖めに來たのだな』。

『へい。左樣で』。

と、顏はにこ〳〵と、手に新聞紙を煽らせやや、さも言ひ難く相な樣子。

『然うか。非常に遲くなつた』。

言つて自分は、一寸眼で會釋して、これを機會に其儘、話を打切つて、門を飛び出て電車に乘るべく急いだ。

斯麼時には電車迄意地か惡い。何時も門を出ると、堀邊に沿うて、左の方停留柱の處へ、待ち受けたやうに二臺も居るのに、今日に限て一臺も影を見せない。――仕方がないから自分は、今、暮方の厭やに碧々とした堀の波へ、後姿を見せて、眼を閉ぐやうにして待つ。が、何だか物寒くて總身がが〳〵と震ひ動く。

昨夜、お密が刺殺されたのは、停留場より少し官署へ寄つた方と言ふから、――あゝ丁度此近邊だ。

冷めたい手で、潛と懷中時計を出して、盜むやうに見ると、五分間も待つた。で、辛との事、塵埃風に送られて、意勢よく、待ちに待つた電車がやつて來た。――自分は蘇生の思ひで飛び乘つた。

幸ひ、車中は乘客が少なかつたので、突如一隅へ腰を下すと、我知らず吐息が出た。

『あゝ可哀相に。お密は自分の現在の夫に刺殺されたのだ、人もあらうに、己の現在の夫に？　そしてお密の先夫と言ふのは。――』

斯う思ひ至つた時、自分は、ふと顏を擡げて、四邊に眼を配つた。と、電燈の眩しい光りが九十度の角にぎらり！

『先夫？　先夫？』

自分は、身震ひし乍らも、又た斯う頭で繰返へして、

『――その先夫と言ふのは、自分だ。正しく此社頭由二郎である！　あゝれ密を刺殺した罪は誰にある。……？』

途端に、車掌が耳朶を劈くやうな鈴を打ち鳴した。で、車臺は見る〳〵流れるやうな進行を初める。――見んでも好い堀邊には、何ぞの白煙のやうに砂塵埃が薄暗を無念相に舞ふて行く。

（其二）

可愛相に。お密が、その現在の夫、石渡金之助に刺殺された原因は斯うである。

自分は、此記事を讀み返へす毎に、お密に對して實に濟まない譯である。お密は已の先夫を――自分を――慕うて、毎夕々々〳〵、雨雪が降つても、風が吹き荒んでも、此堀邊、即ち參謀本部の近邊を、往來して居たのださうで、で、それを亦石渡は毎夕々々〳〵會社から歸へつて來ては、家に居るべき筈の愛妻が、何時も何時も家をからあきにして居ないので、燒氣となつて、探しに出たのであるが、然し渠は、何時も又たお密を探し的てなかつたさうである。

然し渠、石渡の性質は元と至つて溫順で、お密を殺す迄には、餘程の忍耐をしたのであるさうな。――道理で、渠は、れ密と一處になつてから三年、その間、毎夕〳〵々々家をがら明きにしてるお密に對して、唯の一口さへ、小言を言はなかつた。唯だれ密を探し歩いては、その失望し乍らも、ひよつくらと家へ歸へつて來るお密に向つて、別にやいた風も見せずに、反つて殆んど全身の愛を傾げた。お密も又た外から歸へつて來て、己に一點やましい處がないものから、平氣で、澄して、夫の傍

へ寄り添ふ。で若し夫が、何處へ行つて居つたのか、と問ふ場合があれば、唯極簡單に一寸其處迄と言つた、石渡は又たそれ以上聞き正さうとはしなかつた。

然し如何にお人好しの石渡も、一度二度ならず、毎日の事であるので、疑念は疑念を生み、猜疑は猜疑を增して、我が愛しい妻は、巧に己の前を繕うて、密かに仇し夫と袖引合つてるのに間違ひない、それ故に又た子供も出來ないのだと斯う信じ切つて、遂に三年目越しに、悲憤の涙を呑んで、圖らずも這般の出來事に至らしめたのださうだ。

是れを思うて見ると、自分は餘程の罪人であると告白せねばならない。

お密は、自分と相別れてから、毎夕、自分が其後故鄕へ歸へつて、筒井筒のさみ子の家へ養子に行つて、睦じく暮らして居たとも知らず、堀邊を行のやうに彷徨うたさうだ。で、それが爲めに夫石渡の手にかゝつて無慘の最後を遂ぐるに至つた。

そしてお密を及で以つて刺殺した彼石渡は、又た死刑にでも處せられるのであらうが、其源泉はと言へば、何の罪も、何の罪も、皆此自分に在るのだ。

そして一説には、お密は精神に異狀を呈して居たのだと言ふ。さもあつたらう。

あゝ自分は實に濟まないことをした！　自分は、れ密や、石渡に對して、茲に何れ程の謝罪して宜いか殆んど分らない。

斯う思ひ續けて居る內に、車掌が、とんきやうな聲で、

『小川町！　小川町！　小川町お降りの方は有りませんか？』。

と怒鳴つた。

電車は、何時の間にか小川町へ停留つたのである、然し自分は、斷じて下車しやうとしなかつた。相變ちずお密の事を腦中に繰り返した。

『お密は死んだ。刺殺されたのだ、可哀相に。……あゝ誠に濟まない事をした！』。

自分が、神田松住町の住家へ歸へると、妻のさみ子は、春枝を抱へて、いそ〳〵と出迎えた。

『お歸へりなさいまし。ま、今日は大相れ寒むかつたでせう？』。

『ん』。

言つたが、自分は、更らに、『否や別に――』。と斯うつぎ添えた。

『だつても阿夫、眞青氣な顏をしてらつしやるわ。おは、は。――阿夫、今日は何時もより、大相れ寒いのですもの』。

嫣乎として、

『然う思つて、妾、整然とお炬燵へ火を注いで置きましたから、早くいらしつて、おあたりなさいましな』。

言つて、『お寒むかつたでせう』。と、又た言ふ。

自分は、それには拘はず、默乎で奧へ這入つて行くと、妻は、後から障子を閉めて從いて來て、

『おあたりなさいましな。今、丁度善いお火なのですから』。

言つたが、相變らず自分が返辭をしないので、

『それとも先さへ御飯になさいますか？』

『ん、何ちでも宜い』。

『ぢやま、おあたりなさいよ。今、眞どに善いお火ですから。――うれともお腹がたんと空いて？』

自分は、默つて、髮振し乍ら、乃でつと炬燵へ這入つた。すると妻も差向ひに炬燵へ這入つて、

『阿夫、阿夫』。

と、宛然饒山に言ふ。

『何んだ』。

『阿夫、春枝は今日ね、ぱゝ、まゝ、つて言ひましたよ。斯麼口付きをして――』

妙な口眞似をして見せる。

自分は思はず微笑まれた。

『然うか、それは好かつた。――今、春枝は眠つてるのかね？』

『え、、先刻から、阿夫がお歸へりなさるほんの少し許り前に眠りました。それ迄、もうそれはは[illegible]してたのですけれど――』。

『然うか、可愛いもんだなあ』。

『え、』。

嬉相にしたが、『善いお火でせう！』

『ん。暖かだ』。

『心を籠めて注いでた炭なんですもの。暖かですわ』。

『それは有難い』。

乃で二人は、暫時默乎で顏を見合せて居たが、

『阿夫、今日、お加減でもお惡いのぢやなくつて？』

ひよいと妻が、斯う叫んだ。

『何故。

『何故つても、斯麼善いお火なのに、未だお蒼いのですもの』。

『然うかね、ぢや寒いからだらう』。

何氣なく言つて除けたが、其實、自分の腦中は、お密の事でこんぐらがつて居るのだ。

『だつても阿夫、お役所には暖爐があるんでせう』。

抑へ付けるやうに言ふ。

『ん、暖爐はあるさ。けれども寒い時には、誰も一樣に寒いものさ』。

『あら、阿夫、先刻なんぞは寒くないとか仰つて。負け惜みが強いんだわ。惡らしい』。

『惡くらしけわ、仕方がないから打ち伸ばして呉れるさ』。

自分は、實際お密の事を苦に病んで居乍らも、斯う言つた。

『おや、一寸春枝を預つて、下さいな。妾、今、お膳を出しますから。ね、好くつて？』

『よし』

妻は、勢よく起上つて臺所へ行く。

（其三）

自分は、自分の前生涯を白狀する。――

實際、自分は以前、此度刺殺されたれ密を非常に戀したものだ。戀ひして最後に二人して一家を持つたものだ。

それに死んだお密は、現在のさみ子よりも一等勝れた美人であつた。そして今思うて見ると、氣遠仲々好かつたのである。

で、自分が、抑もお密を戀ひしたのは、四年も以前の事ではあるが、さて斯う思ひ繞らして見ると、昔事には思へないやうだ。

自分は、當時學校を出て、口があつて、やつと參謀本部の飜譯課へ出た許りで、未だ下宿生活を送つて居たが、緣とは不可思議なものである。

自分が、本郷のさる下宿から、不圖、神田邊へ變はり度い氣がして、神田の、忘れやうと言つて忘れることもならない、矢塚と呼ぶ下宿へ變つたが、其所にお密が居た。――殺されたお密は事實、其處の下女であつたのだ。

で、人情の不可解と言つて好いか、或は心理的作用の不可解と言つて好いか、自分は、此方の下宿から、其處へ、矢塚へ變つた時、お密を一見して直覺した。言ひ換へれば、ちよいと見に、もう惡くない奴だと思つたのである。又たお密の方でも、自分と同一心理作用に陷つたのである。

が、然し、茲に事があつた。

然し自分は、今、此事を說き明かす以前に、少し自分の其當時以前の境遇を述べて置き度いと思ふ、即ち自分の學校時代の事である、そして又た此學校時代の事を述ぶるに就いては、勢ひ一言二言、自分の幼時の事をも說き明かす必要がある。

自分は、元來十三の年齡に兩親に死に別れて、其後、一年が程は親戚へ引取られて厄介になつて居たが、一對幼い頭へ、激しい悲みを刻み付けられた故か、それとも又た天性、大膽であつたものか、或は亂暴なものであつたかは知らないが、事實は其一年許りの間に自分は遂に親戚の家を脫走して、東京の地へと走しめた。斯くて、自分、自ら好んで、苦しい奪鬪の歷史に入つたのである。

東京の地へ到着いても、元來拔け出して來た身は、何方を向いても、便るべき帆綱とてはなく、雨に打たれた小雀の、流石に其無鐵砲さを、痛恨に感じた。が、茲に二度心から勇氣を鼓して、三度、志ならずんば、死すとも墳墓の地を期せんやと、我と我が心の底に誓つて、東京の地に止まるべく石の如き信仰を作つた。

斯くて新聞配達、牛乳配達となつて、父母は無論のこと、兄姉さへ持たない身の、破れ果てた衣の袖に涙を嚙み、又たは後、車夫となつて上野の霜夜に慨き、日から日、年から年と、言ふべからざる苦學の中に、中學を卒えて、それからは激しい勞働もせずに高等中學校を卒えたのであるが、然し、かばかり健鬪的生活をしたにも拘らず、例令瞬間たりとも死くなられた父母の事が、念頭を去らなかつたのである。

で、自分は、丁度、高等學校（で、一寸斷つて置くが、自分は、憐れにも初志を貫徹する事なく、高等學校を卒えて、大學に入らず、實に中途目的を一變したのである。——然し變じたのには相當の理由があつた。かいつまんで言へば、人生大名を爲すも、爲さゞるも、肉体は同じく一生涯しか保たない。乃で人生の着實な目的とし言つば、是れ生活である。何う せ大偉人には、自分ながらなり得ないと信じる者が、大偉人になれそうな事もなし、寧ろ普通の生涯で滿足するが、全く滿足であらう。と斯う信じたからであつた）時代は、全く精神的に苦んだのである。

當時の自分の心の有樣をかいつまんで述べて見れば斯うである。

自分は、一面では堪えず勇氣天を摩するが如き氣焰を吐いて居たが、其實半面では、寂寥の感じに堪えなかつた。

自分は女々しくはあるが繰返へして言ふ。絶えず死くなられた父母の事を思うて泣いて居たのである。

實際、廣い世界に、唯の一人さへ、自分の慰籍者となる者はなく、友達と言へば、皆淺薄な奴計り、折角、自分が胸襟を開いて語つたかと思へば、其尻から裏へ廻つていけすかない、惡口吐いたり、嘲笑したりなぞする。斯樣な社會にあつた自分は實に言ひ難ない苦痛を感じて居たのだ。

で、斯う言ふ具合で、眞の慰籍に喝えて居た自分は、何故か、お密を一目見て慰籍の女神だと直覺した。——自分が、初めてお密を見た時の心理狀態は、實際斯うであつた。

が、前にも言つた通り、茲に事があつた。事と言ふのは他でもない。當時は自分を非常に苦めたものだ。

乃で自分は、自分の以前の事を詳かに書き述べやうと思ふ。

自分が、本郷から、其お密の居る下宿へ引移つた二日目の事である。丁度日曜日ではあるし、自分は、希臘史を見て居ると、突然男のふざける聲が聞えるではないか。自分の頭には、同時に一種言ふべからざる苦痛の影が宿つた。

『おい、厭やなのかい。——そうだらう俺見度いな者は、てんで虫が好かないのだらうな。——否や必つとそれに違ひはないよ』。

馬鹿な、幾計美人であつても下女見度いな者に。一對何と言ふ下宿人で、幾歳位の奴か知ら。——と實際、自分は、最初の瞬間には斯う思つたのだ。然し直ぐ次の瞬間には、もう腦中が取亂れて、其聞へた聲が氣になつて、眼は本の方へ向けては居るが、幾度も幾度も、同じ文句許り讀み返へして居た。

お密は、斯う言はれて未だ少しも返答をしない。或は潛かに、其男の耳邊へ口を押付けて行つて、何か受け答えて居るのかも知れない。

遐が、五分間經つても、六分間經つても、不思議、今度は、其男の方も默つて了つた。さあ、自分の頭はもうぐら〳〵として、手も、舌も全然縛られたかの如くになつて、一筋に燃え切つた。

途端に、

『おはゝは、お廢しなさいよ。簑折さん』。

と高調子に出て、『ぢや、これを洗つて來るので御座いますねえ』。

『ん』。

男は、極冷靜に返辭した。

思ふと、お密は、吸子等を持つて、起上つて、もうぱた〳〵と廊下を彼方へ急ぎ初めた。

此時、自分は、がばと顏を、開いた書物の上へふせて、考へ込んだ。

（其四）

あゝ、お密は、あの書生と一處になつて居る。今、話以外に何か秘密の事でもあつたのではなからうか？

斯う思ふと、僕はもう一切本が讀めなくなつた。ぴたりととじて、腕組むと、我知らず吐息した。

と、又た斯う言ふ考へが浮んだ。

自分は、果して彼女、お密を戀して居るものであらうか。――戀か、戀ならば初戀か？　――そして一見して最早や此初戀の淵に陷つたのであらうか。――うして又た斯う言ふ心理狀態が、普通一般の人々にあり得べきものであらうか。

自分は、自分を疑はしく思ふてと一度、二度、然し事實は、自分を確に戀の淵に

陷らしめて居るに相違ないと信ずるに至らしめた。

然乍ら、自分は、茲で自分の心を、我と我手に制した。

果して彼女は、戀すべき價値のある女であらうか。性質は如何だ。肉体の發達は、如何だ。學術の程度は如何だ。顏は美か、醜か。……然し駄目であつた。

斯う順序を追ふて、是非を正し初めやうと試みたが、第一の部分からして、も駄目であつた。と言ふのは、自分は、此下宿へ變つてから、未だ日數は經たず、如何して彼女の性質の知れやう筈がないのである。——のみならず、最後には、自分の頭は、又た以前のやうにこんぐらかつて了つて、殆んど何事をも辨識じることが出來なくなつて、遂に横に臥つて、頭を兩腕で抱えると、

『戀！　戀！　あゝ戀！』

と、自分の四邊には、何時か神の使が、つどひ來て、自分を惡魔のやうに叱責する！

『戀とは高きものなり、神聖なるものなり、爾は強ひて汚れ傷きたる劣女を捉えて、其處に戀の成立を求めんとするか？　野の草花は聖きも、かの征矢背負ひたる眞の愛者ならざる罪の子が、胸に匂へる薔薇花は何ぞ聖からん。捨て去れよ。煩惱の犬に嚙まるゝ勿れ、然らざれば汝の人格は、日に益々下落ん、憐れなる子よ、己が眼を睜さて、我が高き世界に來りて、救ひを求むべし。爾憐れなる子よ！』

自分は、眼を塞いで、體を石のやうにして居ると、突然、自分の室の障子が押排かれた。

『何んだ！』

と、吃驚して飛び起つて座ると、さつと顏赧めたれ密が、敷居越しに手をつかえて、

『え、、あの只今、れ眠つて居らつしやいましたのですか』。

斯う言つて『れ手紙が參りまして御座います』。

『然うか』。

此間、自分は殆んど無意識であつたが、れ密の手から、來信を受取ると、途端に、一種異樣の感じが湧然と湧き起つた。

お密は、處女である。未だ恐らく生れてから男の肌に觸れたことはなからう。ひらけたらしい處のあるは、要するに多くの客に接するからであらう。でなければ顏を眞赤にすることはない。

思ふと自分は、刹那、又た戀に燃えた。

愛は火焰である、業火である、如何やうなものでも燒き盡す力を持つて居る。神の言葉が何だ。愛の燃え切る處、結句何物もない。唯、愛ある許りである。

其處が本能主義の非なる處だと、笑ふ者は笑え。自分はお密を戀した！

然乍ら、お密が來信を置いて、彼方へ立ち去ると、自分は、又た思ひに沈んだ。

然し先刻の書生の言葉は事實である。苟且にもお密が、あれ丈けの言葉を浴びせ

かけられるには、うれ丈け書生に對して、――自分も又た書生ではあるが――何處か甘い弱點を握られて居るに違ひない。するとお密は、全然處女とは言へない。殊にその後、六分間の間には如何な秘密が包まれて居たか知れない。――顏を赧める、赧らめない、と言ふ事は、又た別に人の性質にあることであらう。

で、此樣にして、一週間は譯もなく經つた。然し自分は、日が經つたにつれて、お密に變な口を利いたあの書生の名前が聞き度くなつた。

で、ある朝のこと、自分は、顏を洗つて來て、何時のやう、頭髮を梳つて居ると、お密が、火鉢の火を携つて來たから、

『れい』。試に呼んだ。

『はい』。と、馬鹿にもじ〳〵とする。

『あの妙な事を尋くがねえ。――』

『はい。何で御座いますか』。

今度は、炭取の炭を火箸の先きで打割々々稍や平氣な顏になつた。

『他でもないがね、此前の日曜日に、お前に妙な事を言うて居た客があるだらう』。

言つて、自分は片唾を呑む。

『へい――。如何な事で御座いませうか。妾、少しも存じて居りませんが。――』

意外な面持をする。不思議な譯だ。自分は、强ひてとぼける者と受取つたから、燒氣になつて、

『はゝゝ、あれを忘れるやうな女は、餘程如何かしてるのだよ』。

『でも妾、少しも覺えが御座いませんよ』。

乃で自分は强ひてあざ笑ふと、彼女は、急に顏色を變えて、炭を注ぎ置いて、さつ〳〵と室を出て行つた。

自分は、其時、又た何故か、彼女を呼び止める迄の勇氣がなかつた。

彼女の後姿をちらりと見送ると、早速鏡に向つて、物思ひに沈んだ。

彼女は、愈々處女ではない。そして思つたよりも、秘密を保つ丈け、それ丈け深刻な女である。

やがて朝飯の膳を持ち運んで來た。然し自分は何故か、今度は默乎で居た。それも亦默乎で膳を取置いて室を出て行くのであつた。

（其五）

自分は、其後、重ねてお密に問正すには、餘りに女々しく勇氣がなかつたが、然し日數が經つにつれて、何時とはなく、あのみだらな口を利いた書生の事が分つた。

別に誰に聞き正したと言ふのでもないが、彼書生は、醫學書生で、苗字が簑折、名を歲二と言つて、今年廿四歲、頭髮を奇麗に梳つた、色の白い、一寸男振の善いのが、それだと迄分つた。

然し乍ら自分は、それを知り得たと同時に、より又た頭を惱ませなければならな

い事が起つた。と言ふのは、れ密が、其後自分に對して、以前のやう、實に愛すべき耻かしい情を含まなくなつたことである。

それはお密は、笑むこともするが、然し其笑むのさへ又た以前のやうな笑み方でない、乃で自分は、彼女と簑折との仲は、確かに結ばれて居るものに違ひないと、確信した。

で、それからは、隙間さへあれば、自分はお密と簑折との樣子を探知することに努めた。と、言つて、別段、人に聞正すのではなく、唯自分獨りで、種々雜多と頭を惱まし、氣を使ふのであつた。

さあ、それが實に苦痛であつた。

お密が、簑折の室へ這入つて行くと、自分は、何時も何事も打捨つて、如何なる話をするであらうか、爲て居るかと、思つては、凝乎耳を澄して聞いて見る。

れ密は又た切りによく簑折の室へ出入するのであつた。で、自分の苦痛煩悶は、

殆んど極點に達した。極點に達しては、何時も又た高が下女位の者を何するか！と、我と我が心に反省し、罵倒するのが常であつたが、然し、今思ふて見ると、自分は全く其時既に戀の奴隸となつて居たのである。で、反省しても、罵倒しても、如何してもお密の事が念頭を去らなかつたのである。

ある夜の事であつた。

十時を打つと、皆、客の寢床を伸べに來るが、その下宿の規定となつて居たが、即ちお密は、十時が打つたので、他の下女等と共に寢床を伸べに來た。

彼女は、彼方の室から、順に寢床を敷き來たつたが、態て自分の室へやつて來た。自分は、丁度惱んで居る折柄、何だか彼女を見ても、彼女は、實際簑折と相愛する仲となつて居るのだ。と、斯う思ふものから、如何も面白くない。否や腹立たしくもあり、情無くもあり、又た怨めしくもあつて、厭味でも列べたいが本意であらうが、そんな事も出來ず、詮方なしに無言で、本でも見てる風態をして居た。

所が、彼女は、自分が然うすげなくして居ても、案外平氣であつた。彼女も、默乎で、押入から蒲團を取出して、さつ〳〵と敷き伸べて、

『お寢みなさいまし』。

と、小聲で言つて、障子を閉て、次の室へ立ち去る。

自分の胸は、もう裂けるかのやうに感じた。あゝ彼女は、實際箋折と一處になつて居る。——さうでなくちや、如何して、自分に對して、今斯樣な体度に出る事が出來やう。咄、馬鹿野郎奴！　えゝろんなふてくされ女が何になるか。今に見ろ、お腹でも大きくして、必つと泣き面を見せるのだらう。さなくば、一時箋折の學資で、二人一處に貸家住でもして、乃で何らかか厭氣が注して　破裂の運命を持ち來すのであらう、元來彼等の戀は、淺薄な戀だもの、然うなるのが數の當然である。然うならなければ、寧ろ不思議な現象結果であらうよ。馬鹿野郎奴が。——

然し自分は、矢張、本を讀むことも何することもならない。頭の底の何處かでは、

れ密の美はしい顏や、後姿、口の利き樣等樣々の事を夢のやう、現のやう、或はぼーと、或ははつきりと畫き出されるのであつた。

くそ！　惡魔！　惡魔！　墮落の奴等奴！　と、自分は、刹那、又た冷靜な理性の念に照らして、神の御聲を天上に求めた。然しその心がけも又た水泡に歸した。

自分は、やがて例へ難ない悲痛の底に誘ひ行かれるのであつた。

相見ての後の心にくらぶれば、昔は物を思はざりけり。

自分は、失戀だ！　失戀の失戀兒である。——あゝもう何にも言ふことは出來ない。唯、悲しい〳〵〳〵許りである。

あゝ世の中に何か辛らい悲しいと言つて、失戀程悲しい事はなからう。辛らい事はなからう。青春客氣の意氣旺んな情熱を持つて居る丈け、それ丈け激しく苦痛を感じる。已の生涯の目的も、何も、斯うなつては、決して考えられるのではない。唯切りに燃え、唯切りに悲しむのである。あゝ其處に亦唯極單な、不完全な、盲目

的な感情のみが獨り湧き起つてはびこるのである。

乃で自分は、又もや苦い理智の聲を頭の底で呼つた。けれども自分の意志は、既に疲れて居たのである。

と、丁度其時、最早や他の室の客の寢床を敷伸べて、今、簑折の室へ行つて居たお密、突然、聲高な笑聲を漏らした、其笑聲は、宛然、自分、此社頭由二郎を侮蔑してるかのやうであつた。

乃で、自分の亂れた耳は、一心に彼簑折の室へ傾けられた。

くせ者なる哉、お密は、故意と、寢所を伸べるのを、悠乎とし乍ら、簑折に向つて、何か小聲で、切かと話かけて居るらしい。又た簑折は、れ密の言葉を聞いて、切りと興を得、興を得ては、冷突の笑を漏らして居る。

もう拾時であるから、世間は大部靜になつて來て居るし、時折電車の通ふのが、話の連絡を折切る以外は、直ぐ隣室に居る程明瞭に、彼等の話聲が聞取れた。

然し何分にも小聲であるので、然う明確に聞き取ることは出來ないが、兎に角、彼等二人は、自分の事を言つては、嘲笑して居るのらしい。自分は、益々癪に障つて、悶えた。眞に泣出したい程であつた。

然し、如何に女の口でも、人の惡口を、無限に續け得ないと見えて、軈てお密は、又た更に次の客の間へ引移つた。

先づ安心！　と自分は一寸胸を撫で下すと、途端、又た彼女は笑つた。

何故だらう。自分は、又た耳を澄した。

豈圖らん哉、お密は、又た其室へ行つても、自分の惡口を吹聽した。

乃で、自分は、もう彼女の度すべからざることを知つたと共に、矢張下女だ。品性がから駄目である。と信じた。

彼女は、恐らく永久に、現在の境遇以上の社會に生活することは出來なからう。井戸邊會議のれ嬶連中に過ぎなからう。又た自分もそれを以つて寧ろ一種の誇りと

して居るのだらう。だから人の惡口を傳えたり、聞いたりして、笑窩に入つて居る。

——到底斯麼女を——。

思ふと、自分は、今又た何故彼女を戀ひしたのであらうかと言ふ疑念が起つた。

——然し自分は、斯う理性的な、健氣な考えを惹起すと共に、又た別に一種言ふべからざる苦痛に刺激せられるのであつた、所詮自分は、お密を深く戀ひして居るのであつた。

自分は、自分を哀れと思うて泣いた。何故斯うも淺薄になつたゞらう。意志が弱くなつたゞらう。彼女が果して戀ひする程の價値の無い人間だと今、現に考えて居乍らも斯うである。あゝ戀とは、不可思議なものとはよく言つた。

如何に美しい、肉体のよく發達したお密だとて、是れを緻細に區分けして是非を考えて行つたならば、何も是い處はない筈、殊に其の品性、學識と來では全く零で、ある、如何に体的に於いて立派で、優美であつても、其内的に於いて貧な者が何に

ならう。生涯自分の助役となり得るものか。實に馬鹿氣切つたことではないか？

其時、お密は、もう自分の受持の客の寢所を伸べ終つたのであらう。又た元へ折歸へして來て、自分の室の前の徹宵ランプの火を細めて、いそ〳〵と廊下を彼方へ立ち去つた。

其跫音が遠かるに從つて、自分は、美しいお密の幼象を畫いて、

『お密！　お密！』

と、切りと頭で繰返へすのであつた。其時都大路の夜は、火廻りの聲が哀れ氣に冴えた。

(其六)

自分は、此晩非常な事を發見した。

自分は、起きて居ても、本は讀まれず、それかと言つて、朋友が尋ねて來さうに

もなく、又た好い加減な時間であるのに、他所へ押かけて行く氣にもなれないので、起きて居て腦むよりは眠ることと、と定めて、間もなく便所へ行つて來て寢床へ這入つた。

併し寢床へ這入つたことは、這入つたが、神經が昂つて仲々眠れない。實際、お密の幼象が、ランプを吹き消したので、却つて明瞭に架空に畫かれて、思ひはそれからそれへと、腦みは腦みを生むのである。

生板の如く硬つた胸を抱いて、幾度となく寢返へりを打つ。苦しいので力一滿吐息したが、四邊を憚つてそれもならないので、愈々益々苦痛くて堪えられない。

然う斯うして居る中に、犬の遠吠えの間、夜陰の物靜かな室々を透して、下宿のぼん〳〵時計が一時を傳えた。

斯う眠れなくちや、明朝の出勤時間に影響するからと思うて、乃で、自分は睡眠に陷るべく焦慮つた。然し焦せれば、焦せる程、神經は宛然奔馬の如く虚空に舞ふ。

何時か、自分は自分を忘れて、

『うん！』

と、苦し紛れに大きな吐息をした。途端、廊下に當つて、人の跫音がめり！ 自分は煩悶の中からぎくりとなつた。

但それは夜中、他の客人が、不圖目を覺まして便所に赴くのではなく、正しく忍足の盜み音であつたからである。

俄然、起上つて、怪物の生体を見届けて呉れやうと、頭を枕から浮かせやうとした自分の胸は、さつとある見ねざる物が來つて、打つと、どく〳〵と見る〳〵非常な動悸を搏ち初めた。

自分は、もう起上らずに、眠つて居るものゝやう、更らに生欠伸をして、爾粧うた。

乃で、件の者は、又ためり！ めり！ と跫音を立て初めた。

自分には、其者が泥棒でないことは、ちやんと直覺に依つてよく分明つて居る。丈け、それ丈け胸は愈々益々動悸搏つ。――そして何故か、起上つて、其者を見屆けて呉れやうと言ふ觀念は溢す程あつても、如何しても起上る事が出來ないのである。もう全身が火の燃ゆる如くなつた。

何でも是れを見屆けねばならない。是れに依つて自分の運命が。――と起うて、今、件の者が一歩進めたらば、今度てそ、ろれを折に驚如起上らう。そして突如、障子を押排いて廊下へ立現はれて呉れやう。すると件の者は必つと驚かう。――併し自分は、其時、強ひて平氣を粧うて、何氣なく便所へ出かけて呉れやう。と斯う思うて、今か、今か、と其一歩の進行の時間を、息の根を殺して待つて居ると、聞えた。

めり！

素破と思つて、起上らうとしたが、不思議、殘念、自分は何故か起上る事が出來

ない、全身は、一時に絞る程の發汗である。――件の者は又も一歩進めた。――やツと思うと、又も。――

これではと思つたが、何故か、自分は如何しても起上る勇氣が出ない。其處に何か大なる者があつて、自分の心の奥底をよく知つて居て、はツはッと、如何にも哲學者らしい笑ひを漏らしてるかのやうに思はれる。

其中、件の者は益々跫音をたてゝ、彼方へ遠ざかるよと思ふ間もなく、しゆ！とそれは不思議な音を傳えた。

正しく彼女であつた！　自分の直覺は、遂ひに寸毫違はなかつた。

不思議な音は、忍び〳〵來て、障子を開けたのである。彼、簑折の室の障子を開けたのである。――繰返して言ふ。そして其障子を押排けた者、件の者は、正しくお密であることを確信した。

自分は、もう死に度いやうな感に襲はれた。――併しその觀念は、決して世の中

の事を解脫して死なうと言ふのではなく、不滿足極つて、不平極つて、癪に觸はり極めて死を覺悟したので。

併し其考えは、不圖、湧き起つて、突然又た他の現在の苦しい觀念に襲はれて、不得要領に其影を斷つた。

突如、現在の苦痛は、例ふべからざる勢ひをもて襲來した。死よりも未だ苦痛であるやうだ。

お密の顏、美しい顏、簑折の顏、さざな頭髮を分けた白ぱい顏、彼等が密會して、手と手と、口と口と、相互ひに握り合ふ時、接觸し合ふ時、其處に湧き起る血管の波は、如何計り樂しく、愉快で。あらうよ！——假令品性はなくとも、高尙な趣味はなくとも、彼等各自身に愉快、快樂の項點だと確信して居るだらう。從つて樂しい言ひ得ぬ光りは、其處に泉の如く湧き出る。

あゝ彼等は、斯くて言ひ得ぬ樂しい光りに觸れるのである。——翻つて自分は、

と見ると、十三から孤兒になつて以來、此浮薄な社會の浪に彷徨うて、曾て樂しい、と心の底に泌み込むやうな、血管を湧して表情に出るやうな樂しい目に逢つた事は、唯の一度さへもない。

そも人生の目的は何處に在る？——同じく生涯を送るには、樂しく、愉快に送るが得ではない乎。それに自分は、彼等の如く樂しく、愉快に送ることは出來ない。何と不幸な、憐むべき者ではない乎。——斯う自已を意久地なく思ふ反動として、自分の心は、もう言ひ得ない程度に燃えて亂れたらしい。——で、何だか、自分は、お密を、渠簑折に奪はれたかのやうに感じられた。

然しお密は可愛いが、又た其處に如何も斯うも、癪に障つて、憎らしくて堪らない處がある。——何時か、一思ひに彼女を打殺して、自分も直ぐ又た自殺を遂げやうか？

然し乍ら、死なうと考えても、さて死なうと言ふ考えは、如何しても起らない。

決行する丈けの勇氣が出ない丈け、それ丈け又れ苦しくて堪らないのである。

自分は、斯麼に悶えて居乍らも、簑折の室に對して、凝乎と耳を立て澄して居た。

――お密は一度、室へ這入つた儘、未だ出て來ないのである。而も障子は開け放つた儘らしい。

自分は、愈々益々もだえた。――明朝の役所の事も氣になるし、それかと言つて、お密の歸へつて行く處でも見届けて呉れなくちや、斷念する事もならず、で、眠る事もならず、もう頭は早鐘を打鳴らすがやうである。

が、その晩、遂々れ密は泊り込んだ樣子であつたが、夜明方、不思議や、お密は、自分の室から出て、いそ〳〵と便所に來る足音がしたので、自分は、やつと安心して、否や疲れ切つて、眠りに陷ちた。

（其七）

きら〳〵と目に映つるものがあるので、火急て起出すと、それは机上の鏡へ、障子の隙間を漏れて、太陽が的つて居たのである。

如何も朝間らしくないので、寢衣の儘、自分は、右手を差延して、札の引出から時計を取出して見ると、午後二時である。――もう出勤することは出來ない。失態！

とは思つたが、如何も致方のない事で。――

で、起上つて、着物を着更へやうとすると、頭がふら〳〵とした。

自分は、夜明方から眠つたとは言ふものゝ、絶えずうと〳〵として、半睡半醒の狀態で、其間、人の笑聲や、洗面水を使ふ水の音、金盥の音、或はお膳の音、殊にお密の話聲等が不安の神經を少なからず惱して、寧ろ眠つては居なかつたのだ。

併し男子たるものが、斯麼弱い事で如何するかと思つたので、勇氣を鼓して、着物を着更へて、齒揚枝を口に、含嗽コップと、石鹼と手拭とを持つて、洗面に急いだ。

洗面から歸へつて、机の前へ押座ると、蕊如、平常の習慣で、新聞紙を手にした。が何故かそれを打展げて讀み下さうとの勇氣はなく、一旦取上げたものを、其儘讀みもせずに打捨つて、今度は例の鏡を取り上げた。途端に筆立の櫻の造花がゆら〳〵と花粉を散らさむ風情であつた。

自分は、此間の動作は、殆んど無意識的であつたが、鏡面の自分の顏を見ると、思はず泣かれた。

一夜の間に、斯うも元氣が衰えるものかと、疑はれる迄に、眼色は活氣を喪ふて、死ぬやうなのに充血して居て、顏色は馬鹿に蒼白い。——阿母さんでも居られて、此自分の顏色を見られたならば、との思ひが、一刹那、潮の如く胸先をついたのであつた。

然し、由來病氣なぞ言ふものは、大抵、自己が弱い感情を起すから、それで自然病魔に侵入され易いのだ。斯麼事を知つてる自分は、其時全身の勇氣を絞り出して、

武者振ひして、鏡を元へ取り置いた、——日光の色を眺めて慰藉せ、希望の意を惹起せ！　同時に斯麼事も頭の一部分に感じた。

泣く者は弱い。ならない事を強ひてならさうと願ふ者は愚物だ、世の中一切の出來事が人間の思ふまゝになると思ふのは、實に何と言ふ馬鹿であらう。——自分は何時か首を垂れて、腕組んで居た。

『然うだ。雲の彼方に美の國があるではないか？　青い花の咲いた、白雲のやうな電氣燈が輝いてる、目に見えないやうな、見えるやうな廣大無邊な花園があるではないか？　其處には得ならぬ音樂の響きが、薫香ある空氣を搖つて居る！　白衣の女神は、舞踏し乍ら、自分を歡び迎えて來れる！　あゝ趣かう。其處へ趣かう！』

斯う考え乍ら、自分の視線は、障子の隙間を漏れ入る糸遊のやうな日の光りを凝視て居た。——無數の塵埃が上よ下よと狂ひ走つて、何か厭感を惹き起すのであつた。

其時、する〳〵と入口の障子が排かれたので、ふり顧へると、お密が朝飯を持ち運んで來たのである。

お密は、破れ相な笑ひを、強いて押包んだ表情の口元で。

『れ早やう御座います』。

と、叮嚀に言つた。

自分はそれには答へずに、別に考えた。――如何も不思議だ。れ密の表情は、飽迄はさ〳〵としてるのではないか、何處にもやましい個處が見出されないではないか。

斯う考えると、初めは一寸嬉みを感じたが、然乍ら直ぐ又た不安の淵に陷ちた。何故と言ふに、其何處に一點やましい個處がないのは、彼女の心の内に、亦一點曇氣がないので、――あゝ彼奴は亦自分を、此自分を戀ひしてる分子をも、其心の内に持つて居ないことが明瞭である。

然し、お密は起ちさうにした座を、折り崩して、遂々可笑相に笑つたが、

『社頭さん。今日は如何かなさいましたので御座いますか？　お顏色が大相お惡いやうで御座いますよ』。

言つた時は、極眞面目な表情であつた。

『否や、別に如何もしないが、頭の加減が少し許りよくないやうだ』。

『道理で、お眼が赤く御座いますわ』。

『ん』。

自分は、今更らに、語り出でやうとする勇氣が出ないのである。唯だ考えた』。

すると彼女は、何だか濟まなさ相に、矢庭に起上つて、室を出て行つた。

實際、それでは昨夜、障子を押排いたくせ者はれ密ではなかつたのだらうか。でなけれあ彼女も睡眠不足で、必つと生理的異狀がなくちやならない。自分のやうに、眼が充血してるとか、或は頭が重くて、氣分が晴瞭せぬとか、何かでなくちやなら

ないが事實れ密には少しの異狀を認めることが出來ない。――それだとお密は、自分が最初、直覺した如き處女で、可愛い、惡くない奴である。が、然し、昨夜簞笥の室の障子がしゆと押排かれたのは事實である。何も自分の神經が血迷いて、斯う觀察したのではない。事實は永久に事實である。此出來事は、到底自分の頭から打消すことは出來ないのだ。

「れ密！」

然らば、彼女は、豫想以外のくせ者であらう面に處女らしく、天眞な表情をして、內は夜叉、否な本能の淫奔に任せて、あらゆる男子をくはえ込み、――あの下等社會にも、高等社會にも流行る淫賣婦的の行ひを爲てる、世にも惡むべき、將た憐むべき墮落女であらう。

が、然しそれにしては、それ程墮落してゐる品性の低い女としては、餘りに外面（身だしなみ）が亂れない。世の中に、果してかゝる深刻な女性があるであらうか。

自分は、考えれば、考える程、頭がかき亂されるやうで、愈々益々何が何だか分らなくなつて了ふ、實に不思議である！

『然し自分は、自分で自分の事を考えて見れば、又た不可思議である。何故かと言ふと、自分は、最早や先刻、雲の彼方へ理想園を作つて、それに憧れ樂まつとした身が、假令、お密が如何であらうと。如何樣な事をしやうと、一向かまふべきではなからう筈。それに女々しくも、執念深くも兎や角と思ひ煩ふ。

然し其處が人情の欠點であらうか。或は美處であらうか。――と此處迄考えて來たが、もう頭は熱して、眼はづきく〳〵と飛び出るやうで、仲々、朝飯を喫べやう處の騷ぎではない、もう座つて居られなくなつた。

慕如、寢床へすべり込まうと思ふと、初めて氣着いた。寢床は、疾くに、自分が洗面に行つた後へ、お密が這入つて來て寢床を取り片付けて居た。（何時も然うである）

で、自分は、手を打つて、誰か下女を呼ばうとの考も起らず、ふら〳〵と起ち上つて襖へ手をかける。ぐら〳〵と踏み締める壓が搖らいで、天井の張板と入り代りをやる、全然酒にでも醉つたかのやうだ。

自分が、敷寢を一枚手にかけて、倒れるやうに敷きかゝつた時、突然、左手の十能火種を持つたお密が、障子を押排いて、美しい半身を見せた。――もう自分の勇氣は、立處に失せた！

『ま、大變にお惡いので御座いますねえ。妾が伸べますから。――』

（其八）

自分は、それから凡そ一個月間は、病床を離れることが出來ず、非常に苦んだ早速、お密が駈け付けて呉れた醫士は、病名を神經衰弱と診察して、自分は全快後も、容易に普通の健康狀態に復へることが出來なかつた。

さて自分が、初めてお密と手を握り合つて、相互ひに胸の底を打ち明けたのは、その病床に在る時ではなく、自分が快服後未だ官署へ勤務する譯には行かず、矢張下宿の二階でごろ〳〵とぶらついて居た、其ある日の午後の事であつた。

然しお密は、自分が、病氣中も、なか〳〵叮嚀に看護して呉れた。殊に後で聞いて今更のやうに顏を赧らめたのは、自分が病中熱に浮かされて種々雜多な事を口外した一事である。

『あゝ、刺殺されたお密は、實に美しかつた！　優しかつた！　然し今更詮術もないことで自分は、實に濟まない事をした譯だ。

自分は、ある日のこと、お午飯を喫べると、病後ではあるし、ステッキに上草履と言ふ裝束で、俎橋から、九段の靖國神社へかけて、ぶら〳〵と心任せに散歩いて歸へると、疲勞氣味になつて、足袋の砂塵埃を拂ふ氣もなく、室の窓の障子を開け放して、どつかりと休足んだ。

然し其疲勞れた中から、矢張お密の事を考えて居た。

すると、其時、手を拍つた覺えもないのに、突然、入口の障子が押排かれたではないか。で、自分がひよいと、此方へ顏を向けると、其拍子に、れ密の視線と自分の視線とは、期せずしてひたと合した。――不思議！　お密は直ぐ眞赤になつた。

自分は、異樣の感に打たれざるを得なかつたが、然し、強ひて平氣を粧ふて、依然窓へ凭りかゝらうとすると、れ密は、ずつと中に這入つて來て、もう惡びれもせずに口を切つた。

『社頭さん、れ疲勞で御座いましたらう』。

『ん、疲勞れた』。

流石に、自分も、斯うはつきりと返辭した。

すると彼女は、つと右手を差伸す。自分は、何を取出すかと思つて、心臟をだく〳〵させて居ると、何時の間に持つて來て置いたのか、片脇へ取置いて居た湯沸を

案外平氣で、澄して差出して、

『お疲勞れでせうと思つて、整然とお湯を持つて參りましたから、お上り下さいまし』。

然し、其語尾が馬鹿に、深く、强かつたので、

『ん、難有う』。

言つた自分の口調も、多分力が入つて居つたらう。――全く人の直覺作用と言ふものは、到底言葉では言ひ盡せない慧敏なものだ。

すると彼女は、其時、默乎で、茶器を自分の手許へ押進めた。

自分も亦無言で、其吸子の蓋を取除けて其中へ別に此方から茶壺を執つて、茶を入れた。

一寸言つて置くが、其やつかと言ふ下宿は、客人と言ふのは、全部學生であつて、只自分が一人丈け、參謀本部の官吏であつた。であるから二人許りで、斯う向ひ合

つて座つてる自分には、言ひがたい血の熱が燃え切つたのである。

『社頭さん！』

お密は、言ひ難くさうに、それでも、斯う思ひ切つて言ひ放つた。

『ん、何だ』。

『妾ねえ、一つ貴下にお願ひが――』。

雙の瞳は、夢見るやう情に輝いた。

『何だ』。

自分は焦き込んだ。

『妾ね、もう疾から。――何でしたの――』。

と、彼女は凝乎と呼吸をためた樣子。

『ん』。

自分は、何の返辭か知らないが斯う言つた。するとお密は、急に、

『ま、妾、お茶を注いで差上げませう。それでなくちや申し難いので御座います』。

『然うか』。

自分は、何だか無意に返辭したやうに思つた。が、然し直ぐ又た、

『然し、下へ行つて居なくちや不可ないだらう、下は今頃多忙しいのぢやないのかね？』

『え、』。

唯、首肯いたが、『でも一寸位宜いので御座いますよ』。

『――』。

『あのねえ、ぢやこれは妾が注いだのですから、何卒か召上つて下さいまし』。

と、乃で茶を自分へ押進めて、又た、

『あのねえ――』。

『何だ？』

『あゝ、妾、早く申上げなくちや不可ないんだけれど、今の内、誰も書生さんは學校へ行つて、丁度お留守だし。ぐづ〳〵してると、又た下から呼ばれるんだし。早く申上げたいんだけれど――』。

彼女は、我と我が胸を抱えて、はそ〳〵とした聲で、斯う言つたが、

『社頭さん！』

又た斯う言つた。

『ん』。

自分は、もう居堪らず、つと寄り添つて、彼女の手首を取上げた。刹那、彼女も亦自分の手首を握り締めて、呼吸をぱづませ〳〵眼には感謝の意を表した。

眼に見ぬ二人の血の中には、何が秘んで居つたゞらう。神獨り、是れを知り給ふたのであらう。

其時突然、手が鳴つた。それは下に居る下宿の主婦がお密を呼つたのである。

俄然、二人は夢から破れた。

然し前に告白した如く、運命は、二人を此儘では終らしめなかつた。

（其九）

忘れもしない明治三十七年五月二十五日！　即ちその翌々日のことである。

自分は、もう春先きから何かのやうに、何となく嬉みが湧いて、病氣は全癒したし。ひよいと官署へ出勤する氣になつて、同僚を驚かして、歸へつて來ると、其時、お密は、生憎家には居ない樣子であつたが、自分は洋服を脱いで、和服に改らうとすると、はた〳〵と廊下に上草履の音を立てゝ、急いで自分の室へ這入つて來た者がある。それがお密であつた。

自分は、何となくはつとして、火急て帶を引締めると、

『社頭さん、是れが參りました』。

と、一封の手紙をつき出すと、彼女は不思議にも、火急てるやうにして、亦廊下を彼方へ歸へつて行く。

自分は、さて何處からの來狀であらうかと、先づ机の傍へ座つて、押開かうと、ふと手跡を見ると、如何も見覺えがない、乃で、打返へして差出人は、と見ると、胸がだく〳〵と一時に、心臟が鼓動初めた。

心臟が躍るのも最もな次第で、差出人は、今、てれを持つて來た、お密自身なのであつた。で、自分は、もう矢も盾もなく、急いで封押切つてつら〳〵と讀み了つた。

然し一度讀んだ許りでは、未だ〳〵氣が落着かなかつた。又た讀み初めた。嬉さに動悸は湧くのである。遂々三度、四度も讀み返へして、やつとのこと机の引出へ修つた』。

お密は、實際筆跡が見事で、文章もなか〳〵巧かつた。それも其筈、高等女學校へ三年許り通つたさうで、下宿の下女となつた動機は、兩親の死亡、一家の落魄、其一時の究境が、萬止むを得ず、遂にしかせしめたのである。

然し一寸茲に、高等女學校へでも通學つて居たものが、行き處も方法もあらうに、何故下宿へ行つた、と言ふ疑問が生ずるかも知れないが、否や、自分も實は、一度は其疑問に驅られた者であるが、然しお密が高等女學校へ三年通學つて居たと言ふのは事實で、自分は確實な二年修業證書と言ふ校長の立派な印鑑の捺されたものを見た。最も私立學校ではあつたが、然しなか〳〵大きな私立學校であつた。そして其何故他の良い方法を執らなかつたかと言ふことに就いては、自分は曾てれ密に問正した處であるが、それはお密自身さへ過去をふり顧つて見て疑念に堪えないとの事であつたから、無論、自分の分明さうな事はないが、多分は、究苦の餘り、悲歎の餘り、（一時に父母が、揃うて病死して、死んだ後には、未だ澤山殘つてると思うて居た財産は、悉皆負債の方へ引渡さなければならなかつた）。便るべき親戚はなし、

女教員にならうよりも、寧ろ此方が氣樂で好いと速斷したのではなからうか。然し所詮、自分は事實如何言ふことであつたかは知らう筈がない。

で、れ密は、然う言ふ履歷を持つて居たから、なか〳〵客受げが好かつた。

處で、其手紙の文句は、今晩、日が暮れて三十分程經つと、妾は、友達の、身元引受人の許へ行くと言つて、隙間を貰つて、東明館の前へ行つて待つて居るから、自分に是非に其處迄出向いて呉れ、生涯かけての願があるからと云ふ事であつた。

で、自分が、下宿へ歸へつて來たのが、官署を四時に了つてゝあるから、丁度四時半頃であつたが、自分は、其時もう日が暮れるのが待ち遠しくつて堪えられなかつた。

併し遂々日が暮れた。暮れると、自分はもう疑乎時計を見詰めにかゝつた。今か、今かと思つて居ると、全体速度の早い方の長針なのになか〳〵進み方が遲い。

で、自分は三十分經つのを待ちかねて、急いで東明館の電氣が輝いてる處へ行く

と、嬉しや、お密は約束通り、其所へ行立つて居た。

お密は、自分が近くのを、うれと知ると、

『社頭さん！』

言ひ樣、自分の許へ馳せ寄つて來て、

『社頭さん、妾、眞に待ち遠しかつた　。よく來て下すつたわねえ』。

『――』。

乃で自分は默乎で、お密が手首を握るまゝに任せた。

『何卒か此方へ入らしつて下さいよ。妾の行く方へねえ』。

自分は、彌張默乎で、彼女の後へ立ち續いた。

お密は、袷衣に、白襟の襦袢、少し若くはあるが、緋の色の帶を、故意と太鼓に引結んで、書生下駄に青い鼻紐の緩つたのを、白足袋に穿いて、すらりと立つた後姿、後れ毛が二三本、廂の横手のリボンが、立ち寄れば大樹の下で涼しい身裝。自

分は、うつとりとなつて、彼女が行くがまゝに隨うた。

お密は、東明館の前を、外濠線に沿うて、いろ〳〵と少し急足に、濠邊の暗界へつき入つた。

土黑い鏡面のやうな濠の水の上に、金のやうに映つてる星を左手に見下して、何とか言ふ橋を渡つて、九段の方へ近くなると、案外人通りが少くなつて、今迄殆んど忘れて居たやうな、忘れぬやうであつた自分の心の内は、俄かに新しい何かを感じて、急に心臟の鼓動を覺えた。そして、自分は、

『お密さん！』

と、斯う低い聲で呼んだ。

『え、、社頭さん。あのお氣の毒で御座いますけれど、何卒か靖國神社の所まで入らして、下さいましねえ。お願ひですわ』。

言つて、星明りに白い兩手を合せた。乃でお密と自分とは靖國神社の境内へ向つて急いだ。

自分等が、手を相携えて、九段の坂を上り詰めた時、其處に赤色瓦斯の點いた交番所の前へ、石像のやうに直立して居た巡査が、宛然うさん臭い眼光で、ぎろりと見詰めたやうであつたが、然し自分は、もう血が燃え切つて居たので、其樣な事位は平氣で、上の空に感じて、一生懸命に境内へ這入ると、其時、先づお密の方が、ほつと吐息した、自分も亦思はず吐息を吐いた。

『社頭さん。妾、もう——』。

彼女は、出抜けに斯う叫んで、

『妾を、一處に何處へか連てつて下さいまし。よ。よ——』。

其聲は、半は泣いて居たので、そして兩腕を、自分の胸へ、思ひ切つてなげかけて居た。

『お密さん、君は、僕が好きかねえ、眞個に好きかねえ？』

れ密は、其首を、ぶる〳〵と打震はせ乍ら、自分の胸元へ押着けて、

『え！』

と、明瞭と答えた。

（其十）

自分は、もう何にも言ふ事が出來ないで、唯凝乎れ密を抱き締めたが、然し、暫時あつて二人は、つと思ひ〳〵に立ち離れた。

そして自分は、

『れ密さん！』

と、明瞭と斯う言つた。

『え、。社頭さん、貴下、何卒か、妾を可愛想だと思召すならば、——』

言ひ半して、しはらしくも、彼女は、はら〳〵と落涙する。

『ん。否や、お密さん、僕も實際は、貴女を非常に戀ひして居つたです。——あのやつかへ引越して來た時からですよ』。

『そう』。

彼女は、極仇氣なく言つたが、『でも貴下は。——』

『如何しました。何か變な、氣に入らない素振でもしましたか？』

『え、、否、え、然うぢやありませんけれど。——』

言ひ難く相な樣子である。

『否や、僕は實に嬉いですよ。貴女が、それ程迄僕を愛して居て下さらうとは、全く豫想外でしたよ』。

これには、彼女は返辭をしなかつたが、

『妾ねえ、社頭さん、貴下にお話し申上げ度い事が御座いますの。他に。——聞いて下すつて？』

『え、、如何な事でも承さませう。おつ仰いよ』。

『難有う。ぢや申上げますがねえ』。

と、一寸唾を飲み込んで、

『然し社頭さん。貴下、妾を哀れと思召し下すつて？　ねえ、妾を、眞底から可愛がつて下さいますの？　ねえ？』

『ね、、無論、勿論の事ぢや有りませんか。貴下、先刻から妾が申上げてる事が、お氣が着きませんか？』

自分は、多少叱るやうに言つた。

『ぢや申上げますから、何卒か聞いて下さいましねえ。妾は眞に可哀相な者なんで御座いますから』。

乃で、彼女は、前に言つた如く、己の不幸な境遇を物語つた。で、自分も亦、彼女と等しい、不幸な孤兒であつたことを打ち明けた。

乃で又た二人は、手を握り合つて、死ぬなら諸共に。と、其靖國の神殿の前で、誓ひを立てた。

其後、自分と、お密との仲は、日に日に濃且密となつて來た。

で、其月末のある晩の事であつた。お密と自分とは、又々靖國の境内へ行つて、今度は何處か一軒借り受けて、二人は、天下晴れての夫婦にならう、新家庭を作らうと誓つた、そして自分は、其月一滿で、下宿を引拂つて、しかすべく決心した。

自分は少し許り貯蓄して金があつたので、それを便りに、新家庭を作らうと、最初から其底意であつたが、お密も亦多少の貯蓄があると言ふので、愈益々基礎は堅固となつた。

で、一寸茲で、自分の頭を惱した一事は、お密を、一層の事、下宿の主人や、又た彼女の友人の父親の保證人たる人等に對して、何もかも打ち明けさせて、新家庭を作るか、是か、然らざるが非かと考えたのであるが、結句、誰にも秘密で決行し

たが善いとなつて、其事にした、要するに事の如何を打ち明けるのは何時でも出來る事だと信じたのである。

乃で、日が押詰らない以前に、自分は、官署から歸途、直ぐその足で、血眼になつて貸家を探しに歩いたが、丁度二十九日の日、二時間許りかけ廻つて、誠に恰好な家を見出した。で、早速其處へ引移ることにした。

自分は、茲に新たな生涯を開いて、希望の多い、慰藉の氣の滿ちた幸福な家庭の人となるのだと思ふと、實に言ひ得ない嬉しみが胸をついて起るのであつた。

自分の見附けた家と言ふのは、神田表神保町一番地、正木と言ふ古本屋と、菱屋と言ふ唐物屋との間の細い路次を這入つて行くと、突當りに汲井戸が在つて、直ぐ其傍の小奇麗な荒格子戸の附いた家で、間數は三間、六疊、三疊、二疊の都合十一疊であつて、其二疊が上り框、次ぎに六疊、次ぎに三疊と「（左金尺）になつて、其入口のあいた處が、臺所、――走元である。で家賃は四圓五十錢、敷金は家賃前金

納めなら、特別に不用と言ふので、誠に願つたやうな家であつた。

乃で、三十日の日、自分は何くはない顔で宿所を變えるからと、お密に其旨を告げさせると、早速勘定書を持つて來た、兼ねて期した處と、その〻高通り、拾八圓何某を支拂つて、更らに人車を雇つて來るやう、その都合にさせて、書籍や何かを、早速取り片付けにかゝつた。

間もなく、れ密が出て行くと、お密でない、他の下女が這入つて來て、妾が、お片付け致しますから、と言ふので、自分は手をひいて片付ける者に取り任せた。

間もなくお密が車を備つて來て呉れたので、早速持ち運ぶべき都合にした。

軈て澤山もない荷物を、何にくはぬ顔のお密と、他の下女とが、持ち運んで、二輛の人力車へ積了えて呉れれ頃、ひよつくらと主人が顔を見せて、流石は商賣上手の、御在宿中は。――との禮を述ぶるので、自分は宜い加減に挨拶して、さて室を、一瞥した上で、未だ會釋してる主人を後に入口を外に出た。

自分が、下へ降りて、玄關へ出た時には、もう人車屋が、待ち兼ね顔であつた。で、早速人車と一處に神保町に向つて急いだ。

斯う言ふ具合にして、先づ自分と、自分の荷物丈けは、新しい住家へ引移つたが、さて引移つて見ると、自分は、何だか、れ密が來るのが待ち遠しくてならなかつた。で、自分は、既に人を雇つて、掃除をさせて置いたので、車夫を歸へしてやると、獨りで蒲團等を取片附けにかゝつた。

其時、ばた〳〵と入口へ駈け着けて來たものがあるので、自分は、お密かと思つて、取る物も取敢えず、つと襖の中から立ち現はれたと、正しくお密であつたが、然し自分は、一目、彼女の顏を見て吃驚した。

彼女は、蒼白い顏をして、今、驅け付けて來た爲か、はツはツと息吁いて居る。

『如何したのだ』。

言つて訊くと、

『え、大變ですは。妾、あの主人奴ねえ。今、そらと言つて、直ぐに隙間を出すことは如何しても出來ないつて言ふのですよ。妾、もう氣が氣でありませんから早速かけ付けて來ました。

（其十一）

自分は、少なからず驚かされたが、然し冷やかに考えて見れば、何もお密、彼女の一身を先方へ賣り切りにした譯でなければ、隙間は出せないと言つた處で、出やうと思へば、ずん〳〵出て一向差支へのないことである。で、自分は、突然考えから顏を擡げて言つた。

『出さないからつて、別に、さう心配するは及ばないぢやないか？』

『だつて貴下。――』

言つたが、何を思つてか、さつと俄に顏を赧らめて、差俯向いて、

『妾、眞とに困るわ』。

『何も困ることはないぢやないか？』

乃で稍や手強く言つた。

『だつても貴下、隙間を出さないと言ふのですから。――』

猶不安心相に、其處へ彳立つて居る。

『出さなけあ、勝手に、ずん〳〵と出て來れば宜いぢやないか？　何もかまつた事はないさ』。

『だつて、それぢや第一、荷物を持つて來ることが出來ないんだし、保證人の許へだつて報らせて行きますわ』。

流石は、女性で、斯麼事を苦にやんで居る。

其麼事は、寧ろ杞憂ぢやないかねえ。出て來るのには、もうそれ以上の決心がなくちやならないよ』。

言つて、怒るやうに言ふと、

『それや、妾だつて、充分、充分、決心して居ますわ。けれども、妾、妾の荷物なんぞ、無意に置いて來る必要がないと思ふわ』。

けれど、時と場合では致方もないことぢやないかねえ』。

『ま、社頭さん、貴下怒つて居なすつて？　妾、厭だわ。怒つて居なさるんだと？』

突然、眼を圓らに睜つた。

『否や、少しも怒つては居ないが、然う言ふものだと言ふことを知らせた迄さ』。

自分は落付いて言つた。

然う』。

と　彼女は、嫣乎としたのが、耳邊を染めて、

『それだと宜いけれど、妾又たれ怒りなすつたのかと思つて』。

言つたが、『おや妾、もう荷物も何も、先方へ取り置いた儘で參りませうねえ。然うしませうねえ』。

何となく天眞な、小兒のやうな表情をした。

『然し――』。

と、自分は、仰向いて考え込んだ。

彼女は、唯凝乎、矢張座りも得せずに其處へ突立つた儘で居る。

『然うさなあ』。

『良あつて、斯う言つて、『それも然うさなあ、無意に荷物を呉れて了ふのも殘念なことだねえ。何か善い策はないかねえ』。

『えゝ――』。

すると彼女は、其空想的な眼の睫毛を、黑く、一文字にひつ閉ぢたが、

『妾には、何も考えやうが御座いません』。

言つて、頽然としたやうに溜息を吐く。

『然うさ。何かあり善うなものだが――』。

乃で、自分は、更に考えに沈んだ。――然し乍ら、自分にも、別に大した策略は浮ばなかつた、遂々荷物を捨てゝ、來るやう、二人で決定した。

で、自分は、其晩、お密と二人で新しい家の襖で、誠に樂しい夢を結んだ。

翌る朝、洗面を使ひに起出した自分は何んだか、一種異樣の感に打たれた、昨日迄は、下宿生活の書生生活の窮措大が、今からは一家の主人公として、眞の社會的生活をするのだ。言ひ換へれば眞の社會の一員となつたのである。

で、自分は、同じ裏住ひの一軒措いて隣の妻君が、使水を汲みに來たのに、挨拶し乍ら、又た一面、何やら嬉みに滿ちて、ぐづ〳〵と楊枝で齒を擦つて居ると、其時、唐突に、此裏さして飛び込んで來たものがある。

其男は、車夫体の男で、年頃三十一二、見るから意勢の宜い、いなせ肌の、さか

ぬ氣の奴らしく見受けられたが、井戸側に沿つてつゝ立つてる自分の妻を見ると、

『御免なせえ。れ早うです』。

と、矢庭に立ち止つて、右手の手拭を、胸かけの井へ修めて、

『へえ、少々物をお尋したう存じますが――』。

少し反身加減になつて、はづんだ呼吸を朝の氣に薄白く示した。

『は』。

自分は、ぺつと齒磨の唾を足元へ落して、斯う。

『あの、昨日、此裏へさして、引越してれ出でなすた。えーと、然う。然うだ。社頭由二郎さんてお方があるさうでげすが、一体、貴下方未だ御存知ぢやあげえせんでせうか？』

ちらりと、例の妻君の方へも目配せした、途端、自分の胸は、何故か跳つた。が、然し平氣で、澄して、

『ん、社頭なら、僕だが、何かねえ？』

すると車夫は、

『あ、貴下が社頭さんで、――然うでげしたか。否や、はや、知らねえと言ふ奴あ、薩張仕方のねえ奴でげすよ。はツはツ』

笑つたが、二度許り、續樣に低首をした。で、自分は、其意勢の好いのが、益々氣になつて、

『で、用事は何かねえ、早く聞かせて呉れなからうか？』

『えゝ先生！　何卒か、此人車へ乘つて、直ぐれ出で下すつて。へえ、俺は大急ぎで、一番向車を賴まれやした。何卒か早く、一分間も――』。

言つて、又た意勢よく笑つて、如何も斯麽性急な事を。はツはツ』と、又た笑ふ。

自分は、何だか薄氣味惡くて仕方がない。――れ密の事があるから――。

『一對、それへ乘つて、何處へ連れて行くんだよ』。

自分は、今、楊枝を長刀持ちに握つて、凝乎對手を見詰めた。

『へ、へ、先生、何處つて、整然と定り切つてる處でげすよ、御冗談を仰やつては――俺は、是れでも寢起を打叩かれたもんだから、朝飯も食えねえ始末で持つて、驀如かけ飛ばしちやつたですよ。はッはッ、然し俺も男だ』。

と、二の腕の妙な奴を見せた。然しよく快活に笑ふ男だ。

で、彼は『斯う』。と、もたれかゝつてゞも來さうな樣子で。

『お役所よ！　お役所でげすよ。紋切形だ。はッはッ』。

今度笑つた時には、もう例の妻君は、自分に一寸會釋して、バケツを重さうに提げて、歸へつて行つた跡なので、ひよいと愛嬌に目配せした彼は、遂ひ妙な顏をするのであつた。

『ん。れ役所か――』。

自分は、初めて安心して、『然うか。僕は又た何處から來たのかと思つて。――汝が餘りぶつさうな樣子で飛び込むもんだから』。

『はッはッ。御冗談ぢやねえせ。先生。待合の車夫とは、これでも少つと分つてらあな。

自分は、默乎で差首肯いて、急いで、手を金盥へつけた。

（其十二）

乃で、自分は、洗面を使ひ乍ら、如何な急用か、その用事の種類を尋ねたが、車夫は知らなかつた。唯大急ぎだと、澄して言つた。

自分は、急いで洗面を使ひ終へて、タオルで、顏を拭ひ〳〵荒格子を開けて、家へ這入ると、車夫は、矢張、表に突立つて居るので、

『ま、一服したが宜からう。ろれ位な隙間はあるだらう』。

『眞逆。ヘッヘッ――。然し先生！』

とんさやうに呼んで、『御飯丈けは、眞平でげすよ。大急ぎなんでげすから。ね、俺のお願ひでげすぜ』。

斯う言はれて見れば詮方はない。自分も大急ぎで、上へ飛び上つて、六疊の間へ洋服と着更へるべく這入らうとすると、

『ま、貴方、妾、喫驚したわ』。

と、お密が、其處に居て、自分の胸倉を取るやうにして、

『妾、又、あすこから、妾を連れにでも來たのか知ら、思つて——。好かつたわ』。

然し、其聲は低くかつた。

『ん、我輩も實は驚かされたよ』。

『えゝ、妾も。妾ねえ、走元に居たのでせう。すると、どだ〳〵と、はれ、這入つて來た時の勢ひつちやないのですものねゑ。それだものだから——』。

未だ言ひ續けやうとするので。

『ま、歸つて來てから、寛乎と話すことにせうよ。あの通り車夫が、せか〳〵言つて待つてるぢやないか。可愛相だ』。

『おや、御飯も喫べなさらないで、急ぐに、矢張——』。

『ん。急ぐ行くさ——。何か大至急の用件が湧いたのだらうから——。洋服を』。

『えゝ』。

で、自分は、乃でお密が、差出して呉れるのを、一々素早く服裝して、急いで二疊へ出ると、

『は、は——、先生』。

と、嫣乎し乍ら、もう荒甲子の敷居を股いで、つと表へ立ち出る。

自分は、些の餘裕もなく、お密の聲を後に、急いで、車夫の後へついて、表通りへ出た。

斯う言ふ具合にして、自分は、其日參謀本部へかけつけたが、其急用と言ふのは、

今迄も既に二三度出遇した事で、外國論文を大至急で草する必要があつたのだ。而して言ふて置かなければならないのは、斯麽日に限つて、半日勤務で宜いのである。

で、自分は、其日、土曜でない以外は、決して半日では歸へれないのを、久振の恩典に浴した積りで、得意になつて歸へつて來た。——朝、官署で食パンを半斤嚙つた許りの空腹を抱えて——。

處が歸へつて見て、驚いた。——家はがら空きで誰も居ないのであつた。

『お密！　お密！』

自分は、試みに呼んだ。然し何の返辭のあらう筈がない。——唯、走り元で、鼠がことんと奇妙な音をさせた切り。近所まで、如何やら晝餐時で、案外物靜かであつた。

居ないなあ。連れて行かれたのか知ら。——然し、それにしては何とか始末して行きさうなものだつたらうに、隣家へ尋ねに行つて見やうか。——斯う思ひ至つた

時、自分は稍や安堵した。

と言ふのは、自分が、除り空服であつたので、定めし家へ歸へつて行けば、ちやんとれ膳を据え置いて、お密がいそ〳〵と立ち迎えるであらう。と斯う豫想して、否や、寧ろ空想して歸へつて來たから、それで、其處に、期せずして湧き起つた一種の失望の念がむら〳〵と更らにあらぬ部分へまで食ひ込んで、其處でかゝる疑虞の念が生じたのであらう。と、斯う言ふことを氣着いたからで、又たそれと同時に、何處か近邊の、八百屋へ、何か買物にでも出かけたのであらうと、斯う考えられたからであつた。

自分は、つと六疊へ這入つて、所在なさに且座を組んで、葉を吸かし初めた。——青い煙が、ひゆる〳〵と大和の尖頭から、糸のやうに立ち昇るかと思ふと、忽ちさつと横になびけて、虛空で、輪を畫く餘裕もなく、むや〳〵となつて消えて了つた。

はつと思ふと、お密は未だなか〳〵歸へり相にもなかつた。

軈て、莫は半ば燻り、六分、七分、八分、遂に一本吹つて了つたが、未だ歸へつて來ない。乃で、今度はポケットから時計を取り出して見詰め初めた。――何だか一分待つのが一時間も待つやうな氣がする。半日も待つたやうな氣で、やつと十分間待つたが、未だ〳〵歸へつては來ない。我知らず長い欠伸が出た。

其時、走元で、又た鼠であらう。こと〳〵と音をさせた。――太窟紛れに、今度は、つと起上つて、走元へ行つて見た。

乃で又た失望した。れ密の走元（否や臺所）草履には、水が乘つてあつて、もう餘程以前に出て行つた形跡がある。

『は、連れて行かれたかな――』。

斯う思ふと、もう居堪らなくなつた。慕如表へ出て、隣家の荒甲子を差覗いて、

『御免下さいなせ。一寸失禮致しますが――』。

『はい』。

今、食事中の妻君の聲らしい。

『あの、私、隣の者で御座いますが、一寸失禮致しますが――』。

『はい』。

今度はやゝ度の高まつた聲が聞えたかと思ふと、はた〳〵と、自分が其荒甲子戸へ手をかけて內へ這入らうとする以前に、其妻君が、奥から、火急てかけ出して來て、

『あ、貴下方の奥樣で御座いますか？』

言ひ樣、さつと其處の障子を押排けた。

『は』。

自分は、やゝ面喰つて、どきまぎしたが、恐らく耳朶を赤く染めて居たゞらう。

然し先方は、一向平氣な顏で、其處で、ひよいと初めて、自分に低首を吳れて、

『ま、如何も失禮致しました』。言つてから、

『あの奥樣は、今し方、一寸肉屋へ行つて來るからつて、お出かけになりましたが、——。ま、妾、折角頼まれて居乍ら、何時、お歸へりなすつたとも存じないで、誠に失禮を致しました』。

『いや——』。

あべこべに迷惑を感じて、乃で、自分は禮をのべて、やつと安心して、又た家へ歸へつて且座を組んだ。

然し今度は、莫を抜き取る隙間もなく、いそ〳〵とお密が歸へつて來た。

（其十三）

小刻足に歸へつて來たお密は、一見、何だか斯う浮かぬ處があるらしく見えたが、然し未だ包みも取置かないで、

『ま、お待たせしましたわねえ。妾、早く歸へつて來やうと思つたんだけど——』。

言つて、嫣乎とした。

『だけれど、肉屋の炊事男が、お釣り錢を吳れるのが馬鹿に手間取つたかねえ』。

『え、、然うよ』。

これは強く言つて、『お、そう、そう』。と仇氣なく物思ひ出して、『妾、一寸、お隣りの奥樣に歸つたことを知らせて來ますからね、好う御座んすか』。

『ん。好いとも、早く行つて來るが宜い』。

言つて、自分は、起上つて、服を脫ぎにかゝると、

『あら、皮肉だわ』。

『牛肉だらら、買つて來たのは、それとも間違つて來たのかねえ』。

顏を差覗くと、

『あら然うぢや御座いませんよ。御覽なさいよ。よ』。

と、風呂敷を打開けさうにする。

『好いさ。早く禮言つて來るが宜い』。

『はい』。

乃で、彼女は急いで隣家へ駈け付けたが、直ぐ歸へつて來て、ねぎを剝くやら、麩を水に漬けるやら、膳を出すやら、お櫃を出すやら、形容すれば宛然戰爭のやうであつた。然し流石は老功の士だけにあつて、其間を見て、間に入つて、隙を求めて、隙に入つて、巧にあやなす處、敏捷さは言へない程であつた。

忽ち、自分は、ひちりんを挿んで、お膳に向ふの光榮に浴した。

食事し乍ら、二人は朝の出來事を語り初めた。

然乍ら、ね密は、話中如何もはき〳〵としない素振があるやうに見受けられるので、自分は、心濟まず彼女に問うた。

『如何だ。未だつれに來ると言ふ疑念は去ることが出來ないかねえ』。

『えゝ』。

すると、彼女は、斯う言つて、見事に首肯いて、

『妾、如何したつて、一度はきつと茲へ尋ねて來ると思ひますわ。何故つたら、妾が阿夫と、同じ日の晩に、(阿夫は、荷物と一處に夕景、妾はろの晩でせう)。同じ晩に彼宿を出てるのですもの。きつと疑つて居ますわ。ね、然うでせう』。

と何だか論理的のやうに推して言ふ。

『ん。僕も然う思つて心配してるのだが、然し、それや論理に叶つて居ない處があるよ。――三段論法の法にさ。

だから僕は、必つと、自分達がひけ目があるから、それで大部分は然う思はれのだらうよ』。

『だつても阿夫――』。

言ひ半して、眞赤になつた。

『ん。それは然うだらうよ。先方にも、殆んど汝があつた爲めに、繁盛してたのだからねえ』。

『あら、其麼事はないんですわ。斷じてないのですけれど』、

と、首をなげて、牛肉の箸を取り置いて、

『妾、何だか斯う、今にでも、あの主人、厭やあな顏をして、尋ねて來るかも知れないと思ふわ。其麼氣がするのですもの——』。

『氣がする丈けで、事實尋ねて來なければそれで宜いが、實際、來るかも知れないなあ』。

乃で、自分は、思はず右手にをとがひを撫でた。——そして片手には、あいた茶碗を差出して居たのであつた。

『まゝ、あんな心配相な顏をして居乍ら、人に知れないやうに茶碗を出して、眞とに人が惡いんだわ。おはゝゝ』。

笑つたが、其儘、彼女は、左手に取受けて、飯を盛つて呉れ乍ら、

『妾、ほんとに、それが心配でなりませんわ』。

と、又たしても溜息を吐く。

自分は、其時實際然う思うた。大佛殿はよし燒け盡して灰になつても、我が此新家庭は、斷じて、不運不幸な災禍が襲うてはならない。

二人、手に手を執つて、花の袖垣引結んだ戀の戸の、そのいはえ紐、若しぶち切らうと飛び込み、ふりかゝらうものゝあらうならば、其時、自分は、もう死を賭して防衛に守護に努めやう。我が愛は、世の常に行はれる浮華輕跳な愛ではない。眞の愛である、眞の戀である。我は永年孤獨の寂寥に泣いた、うの其處に慰藉を求めた、求めて、求められたその大なる慰藉の女神とし現はれたのが彼女である。——あゝ自分は、彼女を失へば、希望も何も消散して了ふ。其處に、其世によく生存が出來得るか？——自分は、どんな事が湧起らうと、彼女とは死ぬる迄、離れたくは

ない。繰返へして言ふ。若し離れたら、それは自分が死ぬる、否や死んだ時である？

然乍ら、運命の不可思議な權力は、自分をして、斯ゝる位置に立たしめてるのだ。

――今、お密の刺殺されたことを悔んでるやうな――。

さて、お密が、深かい溜息を漏らした時、突然、表に人があつた。

『御免下さいまし。御免下さいまし』。

と、訪ふ聲は、聞き覺えのない、婦人の聲であつた。

二人は、乃で言ひ合せたやうに、一時に首を傾けた。そして、「妾、出ませうか？」

とれ密が、やゝあつて素振りに見せた。

乃で、自分は否や〳〵をして、つと起上つて、例の二疊の間へ出て、さつと障子を開け樣、

『はい。誰何でいらつしやいますか？』

慇懃に尋ねた。

『一寸、物をた尋ね致度う御座いますが――』。

自分はぎくりとした。

『あの。――』

婦人は、又た叮嚀に頭を下げて、斯う言つた。

年頃、四十位、見るから品格の打上つた、大家の奥樣らしくも受取られるのであつた。

『はい』。

自分は、今度は其處へ正座つて、正式に慇懃な挨拶した。

（其十四）

弱點を持つてる身は、絶えずいらぬ事に迄杞憂をするもので、自分は、此夫人を

捉えて、多分お密の宿の主人の廻はし者でもあるかのやうに受取つたが、事實は決して然うでなかつた。

後では、お密と二人笑つた事であつた。即ち、夫人は、前に此家へ住つてた人を尋ねて來たが、來て見ると、標札が違つて居るので一寸お尋ねして見たが、若しその引越先を知りはしないかと言ふのであつた。

自分は、廻はし者でないから、是非、其引越先を教えて上げ度いと思つたのではあるが、しかし其引越先を知らないので、家主の家を懇切に教えて歸へした。然し後から、自分は、何だか斯うお釣り錢でも得たかのやうな氣持がしてならなかつた。

そう言ふ具合にして、自分等は、一週間を經過した。そして自分は、又た新たに不安の念に驅られざるを得なかつた。

ある日の事、自分は、例の通り勤務を終へて家へ歸つて來ると、その路次を這入るや否なや、自分と入り違ひに、自分を見て、故意と見ぬ振をして出て行つたくせ

者があつた。其くせ者は他でもない、かの醫學書生簑折歳二であつた。

自分も好んで、彼に口を利かうとの觀念はないし、彼も亦一種奇妙な表情をして、逃げるかのやうに路次を表通りへ向つて出て行くのであつた。

自分は、がらりと荒甲子を押排いて家へ這入ると、例の通りお密があたふたと出迎えて、

『お歸へりなさいまし』。

言つたが、何だか、今日に限つて、妙な表情をした。

乃で自分は直ぐ、

『誰か、留守中に尋ねて來たかねえ』。

『イヽ』。

うかない相に言ふ。

『誰だ』。

言つて、今度は靴を脱いで、上へ上つて、六疊へと急ぐ

お密は、後へ尾いて來ながら。

『あの簑折さん』。

思ひ切つた口調で、斯う言つたが、然し何となく悲し氣に聞えた。

『何をしに來たのだ』。

自分は、先づ其處へ座つてから、莨を拔き取り乍ら、斯うやさしく尋ねた。

『えゝ、――』。

何故か言ひ難くさうにしたが、思ひ出したやうに座に就いて、

『何でもないのですよ。唐突に、御免なさいつて、入つてお出でなすつたから、妾、何誰かと思つて飛び出て見たら、簑折さんなのです。妾、一目見ると、もう如何しやうかと思つて――』。

言つたが、矢張お密はしほらしい。涙を溢し相にする。

『で、直ぐと、歸へつたのかねえ』。

『――』。

お密は、胸で、何か心配してるのか、早速返辭をしない。

『上つて、話して行つたのかねえ。眞逆然うぢやなからう』。

『えゝ――』。

差首肯いたが、

『妾、ほんとに困つ了つてよ』。

『如何して？』

問ふたが、自分には、刹那、あることを感じた。

『ん。簑折は、矢張、あの下宿に居るんだらうなあ』。

『いゝね！』

聲高に叫んだ。

『そうか、それなら別に心配する必要もないぢやないか？』

乃で、自分は、斯う言つた。

『だつても阿夫？――』

と又た小首を投げるので、自分は一寸考えて、

『然うか。簑折が面白半分に、間牒にでもやつて來たのか知れないねえ。それだと困つたものだが』。

『えゝ、妾、然う思つて、もう――』。

と泣く。

『何故泣くんだよ。泣くにや及ばないぢやないか？　えゝ、おい、お密？』

自分は、思はずにぢり寄つて、彼女の肩を輕く押ゐたが、

『ずんと不可なけあ、又た他へ引越せば宜いぢやないか？　策は幾何でもあるぢやないか？』

『は』。

すると前掛に、涙を押拭つて、顔を擡げた。然し何だか未だ不安に堪えぬらしいので。

『なあに、心配するには當らないさ、よし又た主人公が、態々れ前を連れに來た處で、如何しても歸へらないと主張すれあ、如何も是れ許りは致方のない事ぢやないか。え、然うだらう』。

『ねゝ、だけれども――』

『だけれども如何したつて言ふのだ。何に少つとも心配するには當らないぢやないかね、汝が、先方へ、別に負債があると言ふでもなからう？』

『えゝ、それは、其麼事はないんですけれど、妾、困ると思ふのですよ』。

『何故？』

『何故つても、あの簑折と言ふ方は、眞に惡い方なのですから、きつと此後、度々

此處へ用事もないのに尋ねて來ると思ひますわ。妾、來ると眞に困つ了ふのですから』。

『來たつて、家へ入れる必要がないぢやないか。追ひ歸へしてやつたら、それで宜いさ』。

『えゝ、然う。追ひ歸へしてやりませうねえ』。

お密は、强ひて笑つた。

（其十五）

然し乍ら、自分は其時そう思うた。然しそれは決してよい方の想像を下したのではなくて、れ密は、實際、あの簑折と、關係して居たものではなからうか。であるから、あれを、さう恐れるのではなからうか。

又た自分は、然う思ふにつけて思ひ出されるのは、自分が、本鄕から、あのやつ

かへ指して、引移つたその日曜日の朝の出來事である。と、宛然、現在の如く、わゞ〳〵と畫き出される。――遂に、自分は、或はそれに違ひなからう。と斯う思つた。

然し、目前、彼女のしほらしい姿を見ると、腦もなく、その疑念はとけ去る。――況して靖國神社の星明りの夜はと、思ひ出すと、唯お密は可愛い、將た我が善良な、至大な慰籍であるとよりか如何しても思えないのであつた。

その晩になつたが、別に何事も起らなかつた。

かくて亦た二三日は夢の如くに經過したが、その翌日の事である。自分は、例に依つて例の如く官署から歸へつて來ると、不思議、否な、くせ者！　かの簑折と、亦た路次の入口で行き違つた。

で、自分は、火急て、家へ駈け込むなり、

『れ密！』

『はい』。

言ひ樣、彼女は轉び出るやうに二疊へかけ出して來て、

『お歸りなさいまし』。

言つて、例の如く、兩手をつかえた。

『ん。今、又た簑折が來たね？』

急いで、自分は靴を脫いで上へ上がる。

『えゝ』。

『如何した。別に聞牒でもないらしいねえ。あの樣子ぢや――』。

『えゝ、決つと聞牒ぢや有りませんよ』。

嫣乎とする。

『で、如何してやつたねえ？』

『え、若如、阿夫が、仰つたやうにして歸へしてやりましたわ。善い氣味よ！れは

はゝは』。

『然うか。それは大出來だつたねえ。以後はこれにこりて、もう來なくなるだらう？』

『えゝ、きつと』。

『然うか、それは上出來だつた』。

自分は、斯う繰り返へしながら、例の如く六疊へ這入つて、洋服を脫ぎにかゝる

と、れ密も後から這入つて來て、脫がして呉れる。

れ密は、洋服を脫がして呉れ乍ら、

『あれ阿夫』、

と、突然、叫んで、驚いてふり顧へる自分の横顏を見て、

『今晩は、御馳走を致ますよ』。

と、今度は押え付けるやうに言ふ。

『何んだ。唯つたそれ丈けの事かねえ。――驚かされたかひがないやうだよ』。

『だつても、家のお金錢で御馳走したのぢやないんですもの。貰ひ物よ。御馳走よ？』

『ま、何でも宜いから早く脫がして吳れ』。

『は』。

乃で、自分は服を脫いで、着物に着なをると、其處へ座に就いて、

『一對、何の御馳走だよ』。

『えゝ、今、言はなくつてよ。おほゝほ、言はないが花ですよ』。

お密の、その表情つたら、實に近來にない天眞爛熳、花の如きものであつた。で、自分はもう言ひ得ない觀喜の情に胸は充ちた。

『おほゝほ』。

彼女は、其時、自分を凝々と視詰めて、又た嬉し相に笑つたが、

『ま、お湯にでも行つていらつしやいましよ。その內に、知れないやうにお膳を出して置きますから、ね、然うしなけあ駄目だわ。おほゝほ』。

今日は、此間ど打つて變つて、馬鹿によく笑ふ。自分も、亦、それ丈け嬉しい。

『ぢやお湯にでも入つて來るかなあ』。

『えゝ、何卒か。――早く暗くならない內に、急いで行つてらつしやいましよ。――きつと御馳走なんですから。――』

『然うか、ぢや牛肉だな。然うだらう？』

『いゝえ。牛肉ぢや有りませんよ』。

廂の前髮を、つと橫に搖つたが、起上つて、臺所の方へ。――

『でも、僕の御馳走なら、牛肉以外にはないよ』。

『處が有りますよ。きつと御有んなさるんだから』。

言ひ〳〵、何をしに臺所へ行つたのかと思ふと、其處から手拭と、石鹼と、垢擦

りとを携つて來て、又た其處へ座つて、

『大有りよ。ありますわ。ま、早くれ湯を召していらつしやいよ。れほゝほ。ま、そんなに顏を顰めなくつたつて好う御座んすよ。早く召して入らつしやいましよ。暮れ了ふと、不可ませんから——』。

『どら、うれぢや行つて來るかなあ——』。

乃で自分は、腰を上げて、お湯へ行くべく起上つた。

自分が、急いでお湯へ行つて歸へつて來ると、もう夕飯ゆ膳は、ちやんと三疊の間へ調へられてあつたが、然し、所以ある哉、お膳には、白布が掩ひかけられてあつた。

『はゝは、やつてるな。白布をかけてるな』。

『れほゝほ。ま、何か、もう一度的て御覽なさいよ。ね。何でせう？』

『ん。それあ定つてるさ。——牛肉だよ。それに間違ひないさ』。

『きつと？』

『必つとだとも！　間違つたら首をやらう』。

『きつとですねえ？』

今度は眼を圓にして言ふ。

『ん、一寸待つた。矢張生命が措しいからなあ。——こうつと。——』

『ま、此方へお奇りなさいましよ。隨分とお腹が空いたでせう』。

言つて、お膳の傍へ、別に座蒲團を打ち敷くので、自分は、矢張考えながら、默乎で其上へ乘つて、

『ん。お隣から貰つたのだな。きつと？』

『えゝ』。

『何ちのお隣りだよ。此方か、それとも彼方のお隣りの奥さんかねえ』。

『えゝ、彼方のお隣りの奥樣ですよ。——ね、何んで御座います。それぢや』。

『然うさなあ』。

「まあ、又た考えてらつしやるわ。可笑しい。もう日が暮れましたよ』。

『然うか。暮れたらランプを點ける迄さ。その爲めに、ランプは、三つも買ひ置いてあるぢやないか』。

『然うですわねえ』。

つと起上つたが、薄闇に白百合の搖ひだやう。うして一寸後をふり顧つて見て、

『でも、それは的てられないでせう。それには叶はないでせう』。

と、嬌乎とした。

『否や、今、決つと的て見せるから。ま、待つて居るが宜い。――早くランプをお點け、點けたらきつと的て見せるよ』。

『然う。ぢやきつとお的てなさいよ。好う御座んすか？』

『的てるともさ。早く點けて呉れ』。

乃で、彼女は大急ぎでランプを待つて來て三疊へ吊るして、ぱつとマッチを擦つた。――今迄暗かつた室は、一時に目醒めたやうに、其光線に滿ちた。

『言ふか！』

自分は、彼女が未だはやから手を引かない以前に斯う叫んだ。

『れ、ま、喫驚したわ』。

豫想以外に驚いたが、

『え、ぢや言つて御覽なさいましよ』。

『牛肉！　牛肉の物！』

『おほゝほ、ま、矢張的つたわ。然うで御座います』。

途端に、彼女は中腰で、その白布を取り去つた。――驚くべからず。手製のフライ二皿分であつた！

（其十六）

夕飯を甘味しく食べた、その翌日、自分は、例に依つて例の如く、官署から歸つて來ると、又た路次口で、あの簑折に行き逢つた。で、自分は急いで、家へ歸つて、お密に尋ねると、今日も亦來たから、追ひ歸へしたと言ふ。――其日も亦笑つて濟んだが、その翌日のこと、又た自分は路次口で彼と行き合つた。

その翌日も、又た行き合つた。その又た翌日も行き合つた。

自分は、簑折と行き逢ふ毎に、家へ歸つてはれ密に聞いたが、お密は、何時も追ひ歸してやつた、と言つた。乃で自分は、今、別に一種疑念の雲に鎖されざるを得なかつた。

お密！　お密！　彼女はあのやうに美しい、可愛い顔をして居乍ら、自分には、巧みに虚言を弄して居るのではなからうか？

彼女は、あの簑折と、事實、日に、日に情交を通じて居るのではなからうか？

うれでなくちや、簑折が、あゝして毎日來る理由がない譯だ。――簑折は性格が宜くないなかと言ふれ密の言葉も、然う考て見ると、如何やら可笑しいやうだ。――其言葉は、正しく暗にお密が、彼を守護する外反内心の策略的言語ではなからうか？

斯う思ひ詰めると、自分は、突如、お密を打ち殺したくなる。然し又た靜かに考えて見ると、又た然うでもなくなる。――實際、又た自分は、お密の美しい可愛い顔を見ると、もう何にも其樣な邪念を打消すのが常であつた。

然し乍ら、その後、自分は簑折と行き逢ふてと、誠に屢々であつた。殊に自分の頭をさくりと突いて、益々その疑念を深からしめたのは、ある月曜日の日の事であつた。

其日は、例の通り、自分は一對、四時終けで歸つて來る筈であつたのが、思ひが

けなくも、臨時、特別の半日休暇を與へられたので、嬉しさに餘つて歸つて來ると、家の庭には見慣れない男の下駄が脱ぎ揃えられてあるではないか？――　そして何時も矢庭に立ち迎へるお密は、其時に限つて、又た出迎えなかつた。

乃で自分は、胸を躍らし乍ら、來て居る男は、正しく簑折であるな。と斯う思ひ乍ら、つと上へ上ると、其時、初めてお密が、二疊へかけ出して來て、

『お歸りなさいまし』。

と言つた。で、自分は、

『ん』。

と極重く返辭してから、

『來てる客は誰だ？』

『えゝ、あの簑折さんよ。あのねえ阿夫――』。

お密は、自分が尋ねた聲が、餘りに鋭かつた爲か、何だか、斯うおろ〳〵聲で、

又た氣嫌を取るかのやうな樣子をした。

『何をしに來たのだ。

然し乍ら、自分は、隙かさず直ぐに斯う問ひ詰めた。

『――あの、阿夫にねえ、少し許り御用があるからつて、――』

言ひ半して、急にその聲を細めて、

『今日はねえ、藉如、然う言つて入らしつたのですよ。ですからねえ、妾、晩でなくちゃ歸つて來ませんからつて、然う言ひますと、それでも歸らないで、あゝして、今、彼處へ上り込んだ處なんですよ。阿夫、早く行つて何卒か歸へしてやつて下さいまし。妾の力には及ばないんですから。――』

乃で、自分は、兎に角、六疊へ這入つて行つた。

すると簑折は、座蒲團の上へ座つて居たが、自分を一目見ると、矢庭に蒲團を辷つて。

『や、是れは、初めてお目にかゝります。私、簑折と云ふもので御座いますが、貴下が社頭さんで――』。

と、それは恭しく低首をした。

然し乍ら、自分は、極高慢に言ひ放つた。

『然うです。私が社頭ですが――』。

と、流石に、自分は、それでもぶつ切り形には言ひ兼ねて、斯う謙遜した。

すると先方は益々低首をして、

『實は、少し許りれ尋ね申度いことがあつて、唐突になんで御座いましたが、是非にお願ひ申し度いんですが――』。

言ひ半して、懐から、取出したのは、一冊の洋本であつた。それを前へ突きつけて、

『これなのですが、これを御飜譯願ひ度いと存じて御伺ひしたのですが、如何で御座いませう。御願ひすることは出來ませんでせうか？――　それに大變急ぐので御座いますが――』。

然し乍ら、自分は、これこそ怪者であると信じたから、當らず障らず、

『然うでしたか、然し折角の何ですけれど、私も官署へ出て居るものですから、御願ひ通り、義務を果したいは、勢一滿ですが、如何も隙間がありませんから、殊にその大急ぎであるとのお事ですから、到底御希望を全うすることは出來ないです』。

『は、それは失望しましたな』。

彼は、頭を掻いた。そして、『は――』、と又た宛然失望したかの如き樣子をした。

自分は思うた。此廣い東京市中に、飜譯をする人は幾何あるか知れはしない。殊にそれを商賣に、看板を出して居る家が何軒あるか知れあしない。それにも拘らず――、それは多少、下宿で顔を見合せた事てそあれ、然し自分とは、唯の一度さへ口を交はした事はなく、決して知己とは言へはしない――。それなのに、殊更らに、

自分の許へ持つて來て賴むと言ふ理由が知れない――。くせ者！　くせ者！　何と言ふ動物であらう！　馬鹿野郎早く歸れ！

と、心の内では、もう火の燃えるが如くに思つたが、然し自分は斯う言つた。

『それは、何處か飜譯を商賣にしてる處へ持つてれ行きになる方が好う御座いませう。その方が幾何便利で、猶其上早いか知れないです』。

『は、それは然うで御座いませう。然し、實は私、今日、態々此家へお伺ひ申したと言ふのは、その――』。

と故意と言ひ澁つて、

『實は、兼ねて貴下の御實力のお浮說を聞知つて居たものですから――。もう過日中からお賴み申さう、申さうと思つて、お伺ひしたことは、したので御座いましたが、遂ひ斯麼事は申上げ兼ねて何で御座いました』。

言ひ終つて、ちらりとお密の方を見た。

其物言ひ振りと言ひ、且又擧動と言ひ、恰度商人が、人に物を賣り付ける以前のやうなので　自分は、もう今度は、かまはず言ひ放つた。

『は、如何も、昨今は非常に多忙ですから、到底も御依賴をお果しすることは出來ませんよ』。

早く歸つて呉れと言はない許りに言ひ放つた。

『は、それでは如何も致方が御座いません』。

と、矢庭に尻悄りになつて、『これはどうも――』。

と、全然商人なのである。

かくて、彼は、やつとの事で歸つて行つた。

（其十七）

簑折歳二が、歸へつて行く後姿を見送ると、自分は、もう堪えられなくなつた。

『お密！』

自分は、斯う言つた儘、凝乎彼女の顏を見詰めた。

『えゝ』。

彼女は、物憂氣相に返辭する。

『簑折は、唯つたあれ丈けの用事で晩まで待つ積りだつたのかね？』

『さ、それはよく存じませんけれど、前刻入らして、お留守だと言つたのですけれど、一寸御依賴があるからつて仰るものですから、無氣につき歸しかねて何でしたのですわ』。

『然うか、それならば宜いが――、然しね、汝は過日間度々簑折が來て、直ぐに追ひかへしたやうに言つて居るがそれは僞だらう。如何だ？』

自分の胸は張り裂けるやうなので、勢ひ鋭く言つた。

『え、いゝえ。妾、其麼僞なんか言つた覺えはないわ』。

もうおろ〳〵聲で言つたが、

『あら、阿夫、何故今日は變な事を仰やるので御座います。妾、何も其麼に――』。

『ん、ま、然し宜い、汝が然う言ふ考えならうれで宜いさ。宜いがさ、人の道と言ふものは考へて貰はなけあならないねえ。如何だらう』。

自分は、眞綿で首玉を引絞るやうに差迫つた。

『人の道つて、妾、今迄ずつと守つてる考えですわ。何も罪惡なんか犯した覺えは、毛ほどだつて――』。

言つたが、其時、見る〳〵顏を蒼くして、

『阿夫は、今日、何故そんな變てこな事許り仰るので御座います。妾、薩張譯が分らないわ』。

透き徹るやうな白い額に、廂の前髪がぶる〳〵と、搖れる。

『ん、汝に覺えがなけあそれで宜いさ。それ程結構な事はないぢやないか？　然し、

僕は汝に少し聞き度いことも、言ひ度い事もあるがね――』。

言ひ半すと、

『阿夫、阿夫！』

と、彼女は、俄かにはら〳〵と落涙したが、

『阿夫、何を其麼に疑つて入らつしやるので御座います。――ま、今日に限つて、し、しどい事を仰るぢや御座いませんか？　妾、悔しう御座います』。

よゝと許り泣き入つたかと思ふと、忽ち涙に洗はれた顏を擡げて、

『阿夫、阿夫、阿夫は、今日簑折さんが入らしつたから、それで、そうお疑ひなさるので御座いますか。――聞き度い事があると仰るのは、如何な事で御座いますか。何卒か早く仰つて下さいまし。妾、幾何でもお答え申しますから』。

と、乃で、あふるゝ涙を前掛で押拭つた。其顏が、平常とは打つて變つて何とも例へ難ない程氣高く見受けられた。

で、自分の心は、今、少なからず惑ふたが、然し乍ら、疑念は、依然として疑念を遐しうした。

で、自分は、他の一面では、又た非常に心悲しく思うた。――あゝ頼み少ないは人情である。あれ程、生を頼み、死を誓つた、お密の心が、斯く迄淺薄、否な虛僞であらうとは。何と考えて見ても自分には一切分らない、分らないが、然し分らないからと言つて、最早詮術もないことである。

と言つて、自分は又たそれ程容易く滿足は出來ない。否や、不平で、不滿で、忿慨で、悲憤で堪えられない。――よくも此自分を僞つたよな。女性の、而も美しい、優しい顏をしてる身で。馬鹿者奴、不貞腐奴！

自分は、もう全身の愛を傾げて愛してるのに、よくも彼女は、虛僞不善の僞せ愛を以つて、自分をたぶらかしをつたな。――神は此惡魔に對して、何か甚大な罪を下されねばならない。一刻も早く彼女を罰しられなければならない。斯の樣な女性

が生存してる社會は、日に日に悖德敗倫、不廉耻の底に墮落して行かなければならない。神聖な氣品高き社會を造らんとせば、是非に個々一個人の神聖な氣品高き人を作らなければならない。であるから如何しても、かゝる惡魔は、速かに該社會から掃追しなければ不可ない。

お密！　あゝお密！

彼女は、今正しく神のお罰しに依つて、遠く何處の不幸な社會へ追ひやられるか知らないよ。――可愛相ではあるが、然し身自らが犯した因果應報、掃追の運命を擔ふも萬致方のない次第だ。

不貞腐女！　惡魔女！　死ね！　死ね！　我社會は、斷じて貴樣等が如き墮落者の生存の必要を認めない。死んで、樂境へ行かずに、苦境へ行け。否やきつと樂境へは行けない筈だ。

『ぢや聞くがね、汝は、未だあのやつかへ居つた時、簑折君と深い關係があつただらう』。

『えゝ、あの簑折さんと？――』

『ん』。

『いゝえ、そんな事は少しもありあしないわ』。

と、聲を次第に落して行つたが、

『阿夫、それあ、一對何誰から其麼汚はしいことをお聞き傳へなさいました。妾、仰つたお方に依つちやさゝませんから、人を中傷なんかして――』。

一時に聲調が激して昂つた。

『ん、誰にも聞きはしない。整然と、僕がようく探偵して置いたのだよ。包み匿くしをしたつて、到底駄目なもんだ』。

自分は、澄して言つた。

『えゝ、阿夫か。阿夫？――　そ、そ、それあ餘りだわ。妾、悔しッ！』

かつぱと許り、其處へ泣き突伏したが、はらりと後れ毛を首筋に流して、顏を包んだ儘で』。

『阿夫、それあ無實だわ、無實だわ、其麼事を言つて、からかひなすつたて、妾の心は動けあしないんですから。――もう阿夫と誓つてるぢや有りませんか？　それに、それに、阿夫つてば、餘りしどい事を仰るぢや有りませんか。妾、悔しい！　悔しい！　あッ悔しくつて堪らない！』

『愈々ないと言ふのか？　不貞腐女！　正當に白狀しないのか？』

自分は、餘り彼女の樣子が、演劇的に受取られたので、遂に斯う思はず聲高に叫んだ。

『えゝ、有りませんとも、馬鹿らしいてとを……』。

はら〳〵と落つる涙の眼は、何時か血走つて顏は蒼青かつた。

『ふ、ふん。無いと言ふのか？　愈々ないと言ふのか？』

彼女は、唯わな〳〵と口唇を、その白い前齒にきつと嚙み締めて、何か言はんとして、得言はないのである。

『おい、お密！　眞夜中廊下を傳つて、こつそりと籤折の室へ忍び込んだのは、あれは一對誰だつたのだ？』

『知りません！　知りません！　妾、其麼事は些つとも知れあしないわ』。

『日數まで明かに覺えて居るぞ。言はふか？』

『えゝ、何卒か！』

『五月十九日　午前一時三十分頃？』

言葉と共に、自分は、つと座を前へ乘り進めた！

（其十八）

茲で、一寸言ふて置かなければならないのは、お密の性格である。彼女の性格は、

元來激烈な感情家であつて、平常はその感情を包むに優美な愛情を以てして居た。

――であるから平常は彼女の温和な、愛憎し氣な處許りが見えて居るので、實に善いが、一朝物事に激すると、宛然怒濤の荒れ狂ふが如き擧動を敢てした。

斯麼極單な、女性には有り得べからざるやうな性格は、思ふに、恐らく彼女の過去の境遇が、しか感化した力甚だ少くないと信ずるのであるが、然し或はさる天稟の性を持つて居たのかも其處は、自分では全く明瞭に分らない。

『えゝ、五月十九日、午前一時三十分頃ですつて？――』

さて彼女は、自分に鋭どく叫ばれて、斯う鸚鵡返へしに反語した。

『ん、如何だ。それでも覺えはないと言ふのか？』

『えゝ、妾、一寸とも其麼覺えはありませんよ』。

惡るびれもせず昂然とする。

『僕が病氣になつた、初めての日だよ。愈々ないと言ふのか？』

『えゝ、斷じてありませんとも――』。

言つたが、彼女は、矢庭に考えに沈んだ。

『ん、ないと言へば強ひて、此上尋ねもしないがね、ぢや更らに他の事を持ち出すが、宜いかね？』

彼女は、默乎で首肯いた。

『よし、ぢや僕が、やつかへ引越して來た、その初めての日曜の朝、汝は、簑折の室で、何を話して居たよ？　ん？　れい！　こら！』

自分は、彼女が切りと物思ひ顔で居るので、癪に障つて、彼女の手先を打つた。

『えゝ』。

と、暗愁に得堪えぬやうな瞳を上げて、

『あの十九日の日のことは、やつと思ひ出しましたが、あれなら斯うで御座いますよ。夜警の際――』、

言ひ半して、一寸居住を收直してから、

『妾達、やつかへ居た時は、毎晩、交代で室々の夜警をして居たので御座います。——で、あの晩、丁度妾の夜警の番でして、此方の段梯子を上つて、彼方まで、簑折さんの室の前まで參りますと、何故か知ら、障子が排いて居たものですから、妾、そろつと閉して置いて來ましたが、多方、その事で御座いませう。それ以外には、妾、些とも覺えが御座いません』。

言ひ終つて、唐突に、嫣乎としたが、

『あら、その事は、そら、何時も阿夫お仰たぢや御座いませんか？』

『知らない！』

自分は頭を左右に搖つて、

『ぢや、ま、それはそれで宜いとして、次ぎのその日曜日の事は如何だ——』。

と、自分は、未だ言ひ續けやうとするのを、彼女は引取つて言つた。

『え、、阿夫、あれ？　あれは阿夫——』。

さつと顏を染めて、

『あれは何時でも、もう簑折さんの癖だつたのですわ。阿燃事仰るのは——』。

『ふ、ふん、然うか。ま、感心に甘くかばふ丈けが感心さ。それに奇妙によく記憶して居ると言ふのが、不思議ならざるを得ないぢやないか。馬鹿氣たものさ』。

自分は、思はず嘲笑つた。

『それあ阿夫、何ですもの。日曜日のことなんか、妾、よう覺えて居られる道理ですわ。道理があるんですもの——妾、あの日なぞは阿夫の事許し思ひ詰めてたのですもの。それだから——』。

『おい！』

然し自分は、突然、斯う呼び叫んで、

『それぢや、それ程僕に眞情のあるものが、それなら何故、過日中、簑折が度々尋

ねて來た折、汝は、それを一々一口で追ひ歸へしたと言つた？　それにだねえ——決して其樣な話合ふ隙間なぞはあるべき筈がない譯なのに、何日だつたか、簑折が初めて來た日、僕が、間牒ぢやないかと云つて聞いたら、其時、『いゝえ、もう簑折さんは、あのやつかには、居なさらないのですよ』つて言つたが、如何して阿麼事が知れた。一對知るべき筈がないのぢやないか。その理由が、原因がないぢやないかねえ、え、おい、如何したんだ？』

『だつて、阿夫、それ位の事は、聞きますわ。滿更、見ず知らずの人とは違ふんですもの。——幾何お人が惡いつて事は知つて居ても——』。

言つたが、阿夫、餘り疑り深いわ。もう眞とに——』。

『もう眞とに如何した？　厭になつ了ふか。——仕方はないさ。厭やになつても、兎に角口は利いてるのだから怪しい者さ』。

『もうお廢しなさいよ。くど〳〵と、外へ聞えたら外聞が惡いわ。そして午飯にしませうよ。ねえ、お腹が空いたでせう』。

『好い。飯は食はない！』

事實、自分も極單な感情家である。然し女性と違つて、意地が如何しても强い。やり出すと徹頭徹尾やり貫くのが、平常の習慣である。——無論、事の大小問ふべきにあらずである。

『食べないで、阿夫、如何なさるの？　食べずに生きちや居られないわ』。

『何でも宜いさ。其麼事些つとも拘つた事ぢやないよ。——馬鹿野郎！　馬鹿女奴！』

其聲が、餘り恐しかつたと見えて、

『阿夫、厭やだわ。そんなに怒つて許かし居なすつて。——え？　妾に惡るい所があつたら何卒かお怨るし遊ばして！　ね、是れで好う御座いませう』。

『馬鹿云へ。小兒をあやすやうな事を言つて居る！　口で幾何謝つたつて怨せると

思ふのか。罪惡も、甚しい罪惡を犯してるのぢやないか？　こら！』

『あれ、未だ其麼事を言つてらつしやるので御座いますか？　妾、く、く、あッ悔しッ！　なんならお隣の奥樣にでも然う言つて、聞いて頂きますわ』。

ぱた〳〵と落涙する。

『馬鹿！　それこそ馬鹿の骨頂だ！』

『それぢや、一對、知何したら宜いので御座います。阿夫、其麼事仰つたつて、仕樣がないぢや有りませんか？　疑つて許し居なさるのですもの。もう眞に――』。

涙をふき〳〵言ふ。

自分は、唯默乎で、彼女を及ぶ限り、膝下に睨め据ゑた！

（其十九）

斯くて樂しからぬ月日は、四週間を經過した。

其間に世間は、麝金香と花菖蒲とが、最早全盛期を過ぎて、藤、石竹、金しだれ。等が其跡を追うて、今將に植物界を繁はさうとした。

日曜日の休暇を待ち憧がれて、二人連れ立つて日比谷、上野、さなくば、靖國の境内へでも出かけるべきが普通であるが、自分は、昨今、何だかお密と一處に居ることをさへ好かなくなつた。何故かと言へば、此僅か四週の間に、又た度々、路次口で、簑折と出遇したからで。そして歸へつて來てお密に聞けば、何日も、今來て今歸へつて行つた、と紋切形の口狀である。それにお密は、あの事のあつた以來は、以前の、ともすれば浮華に流れはせぬかと怪まれる迄、空想的で、快活な表情をして居たものが、頓と憂愁の、例へば雨催ひの呼吸苦しい空合に、汚れ襯衣でも曝らされてあるかのやうな、見ると直ぐ、誰にでも一種不快の感を與へるやうなのに打つて變つて了つた。

茲に於いてか、自分のお密に對する惡憎は、かの疑念と共に、愈々益々その雲の

手を退しりした。

で自分は、世間は如何でも、お密は如何でも、役所から歸へつて來ると、夕飯を喫べるや否や一生懸命讀書に耽けるのであつた。――で、今、二人の間には、言ふべからざる不安の帷幕が降りて、雙方を極力隔離して居る。

自分の當時の胸裡は實に斯うであつた。

自分は、かくお密の不潔白を認めた以上は、到底永久に彼女と苦樂を共にすることは出來ない。――已に出來ないと言ふ觀念を生じた以上は、全く家庭の平和を求めることは至難である。それに強ひて現在の家庭を維持して居ると言ふのは、誠に矛盾極つた話で、自分は一對此頃何をしてるのだらう。――自分ながら其意義を解するに苦むのであつた。

然し事實一面では、非常にお密に同情した。と言ふのは、彼女も亦自分と同じ薄倖の孤兒であつたから、自分は、其處に如何しても同情せざるを得ないものゝやうに感じた。

實に孤兒とは、物淋しい悲しい者である。天下到る處に我友はなく、慰籍者はなく、絶えず暗愁の雲に鎖されて居る。假令ある物を愉快に感じて笑ふ隙間と雖も、他人の笑ふが如き暢氣さは、到底見出されないのである。

自然の懷に抱かれて、強ひて大なる慈愛に觸れやうとしても、又た他人の如き觀念とは、自然根本的に異つて居る處かあるのだ。

殊にれ密の如く女性であつて見れば、男性と異つて、如何してもそれ丈け悲哀愁を痛切に感じて居る、それなに、自分が、今、彼女をつき放したならば、如何に悲歎憂愁の淵に陷るであらうよ！　實に可愛相なものである

然し自分は、清淨潔白ならざるものと、絶對的に其牛涯を契ることは出來ない。その一面可哀相には思ふが、然し他の一面憎らしくて腹立たしくて堪らない。――阿麼美しい、優しい、顏をして居乍ら、恐るべき罪惡を犯さうとは。實に何とも例

へられない奴である。

自分は、ふり顧つて、自分の過去を考えて見れば、何故、斯麼者と、生涯を契ると言ふ觀念が湧き起つたゞらうかと、自ら怪まれる程である。

で、そう云ふ譯で、自分は、もう日に日に不愉快極まる月日を送つて居たが、ある日の事、自分は例の通り官署から歸へつて來ると、又々例の路次口で、かの簑折と行き逢つた。乃で流石の僕も、もう彼女に同情し切れなくなつた。

荒甲子を、がらりと開けて、家へ飛び込むや否や、

『お密！』

『はい』。

彼女は、憂愁の表情で、それでも火急てゝ立ち迎へたが、自分は、もうその顏を一目見ると。

『又た簑折がやつて來たねえ、一對何用があつて、然う毎日のやうに來るのだえ』。

『え？　何故か、先方で入らつしやるのですから、その理由は妾ぢや分かりませんけれど、――　お出でなさるんですから、もう仕方がありませんよ』。

『それ然うだらう。汝に、何か弱點があるとか、何かでなくちや、來られる理由がないぢやないか。もう一度ならず、二度ならず、來ないやうに云つて置き乍ら、矢張やつて來られるのぢやないかねえ。

言つて、つと自分は、六疊へ這入つた。

『だつて、妾、幾何來ないやうに云ひ置いても、あゝして、先方で毎日のやうに入らつしやるのですから、仕方が有りませんわ。止やうつて、如何しやうつて――』。

言ひ〳〵、彼女は自分の後へ尾いて這入つて來る。

『仕方がないとは何んだ、なんの他事のやうに考えてるが、決して然うでないぞ。僕の身に取つては、非常に重大な事であるのだ』。

言ひ〳〵、自分は、自ら座蒲團を執つて、座に就いてから、

『ま、其處へ座はれ！　僕は、今日は汝に重大な用談をしたいと思ふから――』。

『はい』。

彼女は、しは〳〵と其處へ座に就いたが、

『重大なお話つて、一對如何な事なので御座いませう』。

已に自分の擧動が、並々ならなかつたので、彼女はれど〳〵し乍ら、斯う言つた。

『ん。我々には最も重大な用談だよ。汝も略ぼ胸に感じてる處があるだらうが、ま、ビアでも買つて來て呉れ。――飲み乍ら話さうから』。

『阿夫？』

彼女は、其時、重く鋭く斯う叫んで、

『阿夫、其樣ビアでも召上らなけあ、話されないやうな事、一態、それは何で御座いますか、早く知らせて下さいましよ』。

『ん。ま、ビアを買つて來い。それから話さうから』。

『だつて、何か敎えて下さいまし、妾、もう氣が氣ぢやありませんから――』。

『ぢや買つて來ないと言ふのか？』

『いゝえ、いゝえ。買つて來ないのぢや有りませんけれど、阿夫の、今日の御樣子つたら又た特別なんですもの――』。

『特別なのは、當然の事さ。今、是れから最も重大な用談に取りかゝらうと言ふのぢやないかねえ。――早く買つて來い。來なけあ僕が行つて買つて來る！』

言ふなり、自分は、つと起上つた。

『いゝえ、妾、買つて參ります。今、直ぐ買つて參りますから、何卒か、此處へ座つてお待なすつて――』。

と、彼女は、火急てゝ自分の行途へ立ちふさがつた。

『不生不生に行くのなら宜いが！』

『いゝえ、決して然うぢや有りませんから。何卒か暫時お待ち遊ばして――』。

言つて、彼女は、自分を見上げた眼に、はら〳〵と落涙した。

『早く行つて來い！』

自分の胸は、宛然、枯野の野火と亂れ狂ふて走つた。

『ぢゃ直ぐに行つて來ますから、何處へもれ出かけなすつちゃ不可ませんよ』。

言ひ〳〵、後を見顧へり勝ちに六疊を出て行く。

『馬鹿！　何處へ出て行くか？――　用談があると言つて居るのに、早く行つて來い！』

『はい』。

乃で、彼女はしほ〳〵と荒甲子を出て行くのであつた。そつと六疊から拔け出して、其後姿を見送つた見分は、もう例へ難ない惱みに沈んだ。

如何に、罪惡を犯したとは言へ、今晩限りで、夫婦の緣を切らうとすれば、流石に其處に言外の苦痛が湧起るのであつた。

（其二十）

早速、ピアを買求めて來たお密は、口を拔き去つて、それにコップを取り添えて、自分の今、座つてる六疊の間へ這入つて來た。

自分は、それを見ると、

『ん。コップは一　しかないぢやないか？　今一つ必要だから、今一つ、持つて來て呉れ』。

『はい』。

彼女は、おど〳〵し乍ら、自分が言ふが儘に、持つて來た。そして言つた。

『御飯は、後になさいますか？』

『ん』。

自分は、首肯いて、『よ、其處へ、座蒲團を取つて來て座はれ！』

『はい』。

言ふがまゝにした。

で、自分は、先づ一口飲んで、コップを元へ差置いてから、

『汝も、まあ、今晩は是非一杯やつて呉れ！』

『はい』。

言つたが、でも妾、何日の通り少つとも飲めないのですから、阿夫丈け召上つたら宜しいでせう』。と、恐る〳〵言ふ。

『否や、飲んで呉れ。少しでも宜いから飲んで呉れ！』

『はい、では、頂戴致しませう』。

言つて、コップを惹起す。

『頂戴致しますぢやない。進んで、ぐつぐつと飲んで呉れ。宜いか？　二本買つて來たのだらう』。

『へい——』。

言つたが、その表情は、實に何とも形容の出來ない程憂愁の雲に鎖されて居た。

『ん。これ丈けは、僕が注いで呉れやう』。

と、乃で自分は、壜を取上げて、どぶ〳〵とコップに泡立たせた。

『ま、何だかうす氣味が惡いやうだわ。妾、今日に限つて、もう胸が變てこですわ——』。

と、胸を押えて、顏を顰めて、ちらりと自分の顏を、憂ひを帶びては居てもその鈴張の眼で、見て、

『阿夫、——妾、ビアは、もう頂戴しませんから。……何だか、もう薄氣味が惡くて仕樣が御座いません』。

言つて、その眼を一旦ひつ閉ぢたが、直ぐに睜つて、ほろりと一滴、落涙して、

『阿夫、重大な用談つて、一對如何な事を仰るので御座いますか？　早く聞かせて

下さいましよ。――ね、御性で御座います……』。

『ん。ま、今、話すから、是れを飲め！　ビアを飲んで呉れ。話しするから――』。

自分は、相變らず、儼として體度を壞さなかつた。

『はい――』。

乃で、彼女は、不性不性と、そのコツプを取り上げて、一寸口を押着けたが、直ぐに取り置いて、

『さあ、何卒かれ話し下さいまし』。

自分の心臟は、今、ビアを飲んだ爲か、煮えくり返へつて居る。

自分は、燒けに頭を振つて、一寸、あらぬ方へと瞳を反らすと、もう其時室はう暗くなつて居た。

『ん。ま、ランプを點けて呉れ。暮れて來たやうだから』。

『はい』。

言つたが、彼女は驚いた顏をして、つと起上つて、早速ランプを持ち込んで來て、吊るし線へぶらさげて、ぱつとマツチを擦つて、點けると、元のやうに座に就いた。

思ひ做しでもあらうか？　急に光線を得た室は、何か空氣の變動を認めたやうで、而も一種悲痛の氣が漲り溢れた。――從つてお密の顏は、寧ろ凄慘の雲に蔽れたかのやう見受けられるのであつた。

『れ密！』

自分は、暫時あつて、靜に、押え付けるやうに、斯う言つた。

『はい――』。

途端に彼女は、顏を垂れた。

『僕はね、汝と斯うして、折角、夫婦の契りを結びはしたが、少し考える處があるから、もう今晩限りで――』、

言ひ半して、自分は、ひよいと語調を變へて、

『ま、ビアを飲んで呉れ！　僕が酌をするから――』。

と、罎を取り上げると、

『あ　厭です！　妾、もう其麼ビアは如何しても飲みませんから、――阿夫？』

呼びかけさま、自分の手の罎を不意と、奪ひ去らうとするので、どつていと自分は、それを固く握り締め様、

『不可ない、何をする？　さ、飲め！　何卒か飲んで呉れ！』

『だつて、阿、阿夫は、これを飲ませて大變な事を言はうと思つてなさるのでせう？――厭やですわ。厭やですわ。妾、如何しても飲みませんよ！』

『否や、飲め！　飲まなけあ、聞かないぞ！』

『聞かないつたて、妾、如何しても飲みませんよ。飲む因縁がないぢや有りませんか？　え、阿夫、阿夫、妾は、未來の未來迄も阿夫の妻で御座いますよ！　よ！』

わつと許りに、泣き叫んで、自分の膝へ向つて、崩折れかゝらうとするので、自

分は途端素早く、膝を退去らした。そして、

『お密！』。

それは鋭く、叫んだ。

『いゝえ、厭やです。厭です！　妾、其麼覺えは、爪の垢程だつてないのですから、阿夫、そ、それあ、餘り薄情だわ。薄情だわ……よ、阿夫？……』

『飲め！　然う言はずに何卒か飲んで呉れ！　そして僕は、立派に別かれやうと思ふ。ねえお密！』

乃で、自分は、ずつと聲を落着けて、

『お前も、因果だ、簑折と關係してると言ふのは、全く因果だ！　然しそれは、誰がしたことかと言へば、矢張――』。

言ひかけるのを、彼女は火急て遮つて、

『えゝ？　阿夫？　妾が簑折さんと。――まあ、其麼覺えは、妾、夢にも知りませ

ん。阿夫、そんな事を言つて、――うれぢや誰か外に好い方が……』。
見れば、前髪を取り亂して、齒を咬ひ締つて、顳顬の邊りには、唯ならぬ痙攣の波さへ躍つてる。
然し、例令如何な演劇をした處で、斯うなつては、自分は、なか〳〵初一念を翻ねす男ではない。徹頭徹尾儼として石の如き者である。
『馬鹿を言へ！　其麼女のあらう道理がないか。僕は、汝とは全然人格が違ふ。おい、何時まで包み匿しをして居るのだ。斯うして平和に別かれやうとすれあ、強いてそんな强情を張らうとする？――それで結構良心に恥ぢぬと思ふのか。こら！』
『いゝえ、いゝえ！　妾、決して其麼覺えはないのですから、それあ阿夫、餘り薄情だわ、薄情だわ、妾を斯うして素裸體で連れ出して置き乍ら、そして又た追ひ歸へさうなんて、餘り薄情だわ。薄情だわ、！』
『良心に問へ！　良心に問へ！　もう他に何にも言ふことはない。れい、穩當にしろ！　穩當に。え、然うしなけあ、自分の損だ。穩當にして出て行く策を執れ。ん？』

『いゝえ、妾は、如何しても、阿夫の妻で御座います。――阿夫、然う御疑ひなさるのなら、本人の、簑折さんだつて、誰なと呼んで聞いて見て下さいまし。妾は、清淨潔白な身なんですから、そんな事言はれて默つて出て行かれるものですか？
あツく、くやし！』
『泣いたツて、如何したツて、仕方はないよ。身から出た錆だもの。ん、温和しく、此ビアを飲んか。さ、飲め！　ビアを！』
『いゝえ、妾は、死んでも此家は出て行きませんから――』。
『馬鹿を言へ！　汝が出て行かなけあ、僕から出て行くさ。――早く出て、好きな簑折君と手に手を執つて行くが好い。おい、何を泣くんだ。泣くやうには誰がしたのだ？』

『え、、悔し！　其麽に疑ぐられて。……あッ悔し！』

彼女は、又た慕如、自分を目がけて、取りかゝらうとした。

（其二十一）

『馬鹿、廢せ！』

自分は突然、一喝して、つと彼女の手首を取押えて、

『然う悔しく思ふ程なら、何故好んで自ら其罪を犯した』。

『犯したつて、阿夫、其麽事を仰るけれど』

と、拘はず泣きしやくつて、

『妾、露だも、其麽汚しい覺えは御座いませんよ。それに阿夫は、妾が、餘程袞折さんと深かい關係か、何かあるやうに仰るのですもの。妾、はんとに悔やしくつて、悔やしくつて——』。

『關係のないものが、何故毎日來るのか？　然う言ふことは、幾度繰返へし度つて、僕の心を疑すまでの證明にはならないから、宜い加減で廢せ！　え？——　泣いたツて致方もないことさ』。

『だつて、妾は泣きますわ。阿夫は妾が茲を出て行かなけゝ自分から出て行くと仰るのぢや御座いませんか？』。

涙を拭き〳〵、斯う言ふ。

『それゝ、然うさ。永久に連れ添ふ考えのない者と、何時迄、一處に生活して居た處で、お互ひに迷惑千萬な事ぢやないか。早く離れて、早くお互ひに善い方針を立てるが、最も穩當な策だらうと思ふねえ、如何だらう』。

『それぢや、阿夫は、如何しても、此妾と別れなさるお考えなので御座いますか？』

彼女は、何を思つたか、此時、ひよいと顔を擡げて、雙の瀦涙を押拭うて惡びれもせず斯う言ひ放つた。

『無論然うさ。僕は、戀ひを戀ひするやうな人とは斷じて違ふからねえ。矢張古いやうだけれど一夫一婦が、僕の根元的（或は絶對的と言つても宜い）思想になつて居るのだからねえ？』

『矢張、疑つてなさるんだわ。くやしッ！』

『何も疑つてるのぢやないさ。事實を事實として推してるのだから、それが悔しけあ、汝は、汝を勝手に攻めたらよからうよ』。

『好う御座んすよ。阿夫、妾が是れ程申上げるのに、妾の潔白な事をお認め下さらぬのですから。――えゝ、好う御座んすよ。えゝ、妾も覺悟致しましたから――』。

と、整然と居住ひを取直して、きつと自分を見詰めた。『――一生疑ぐられた日には大變ですわ』。

『よし、然う言つて呉れゝば、實に難有い。ぢや正しく簑折と關係があるのだらうな。――問ふまでもないけれど――』。

『え、否ね、そんな事は斷じて有りませんけれど、――もう、其麼に疑られて許し居ては妾がつまりませんから、妾の方からも此事を申出でますよ。離婚の事を――』。

『はゝは、飽迄簑折の名前を陰蔽するな。――否や、それ程迄夫を愛すれば好いさ。將來は、極めて幸福に行けるだらうよ』。

『もう其麼事は仰やつて下さいますな』。

言つて、彼女は、眼を閉ぢたが、

『それぢや妾、今此ビアを頂きますよ！』。

『ん、何卒か飲み干して呉れ。御願ひだよ』。

『はい、それぢや見事に頂きますよ』。

言ふなり、彼女は、眼を睜くと共に、自分をきつと睨め樣、コップを取上げた。

その手がぶる〳〵と震ふ。

流石に自分は物憐れに思うた。罪ある小羊の、今神壇に惡血を絞ぼらるゝに當つ

て、初めて其過去の罪惡が如何に大きかつたかを知つた。あゝその刹那の悔悟よ！

自分は同情せざるを得なかつた。

況して、此行先き、彼女が、果して幸福に平和に生活し得れるであらうか？　なゞ危虞の念を抱くに當つて、自分は、愈々益々彼簸折の人物性格を疑はざるを得ないのであつた。

然し乍ら、事已に休矣、自分は、彼女が自ら其罪を悔ゆるの日は、必らずくれ以後にも亦來たるであらう。と言ふことを、彼女と別れて、彼女を送くるせめてもの心やりとした。

彼女は、その震ふ手先を、我眼と平行させたかと思ふと、ぐつと一口小氣味よく仰いだ。

と、思ふと、又、又、と言ふ具合に、遂々見事にコップを空けて了つた。

然し宛然、毒杯でも仰ぐやうな樣であつたので、自分は、かのソクラテースの臨

終をふと思ひ浮べざるを得なかつた。然し彼女は、決して彼程の賢哲ではない。

『さ、美事飲み干しました。これで阿夫は御滿足で御座いませう』。

自分は、默乎で打首肯くと、

『ぢや妾は、これで出て行きますから、阿夫――、否え、社頭さん、何卒お身を御大切に遊ばして――』。

明瞭と言ひ切つたが、低首して、顏を擡げた時、その眼から、はら〳〵と涙が落ちた。

『ん、然し、今から出て行つても困らうから明朝出て行くが宜い』。

乃で、自分は、我知らず斯う言うた。――これが先天的同情心とも言ふのであらうか？。

すると彼女は、

『い、え』。

と髮振して、『妾は、もう斯うなる上は、此家の者では有りませんから、早速出て參ります』。

『ん、ぢや、それ程の覺悟があれあ、早速出て行くが好い。ぢや、隨分行くさき、御身を大切になさい。陰ながら、お祈禱します。岡田さん！』

『難有う存じます。社頭さん、それぢやこれで失禮致します。貴下も何卒か御身體を御大切に遊ばして——』。

『難有う』。

自分は、一言謝してから、

『然し、今晩、早速出て行つて、落着く先さがお有りですか——』。

『え、、それは妾、整然、胸で定めて居りますから、御心配には及びません』。

『そうですか？　それぢや此家產を分半致しませう』。

『社頭さん！』。

突然、彼女は、叫んだ。そして、

『妾、それ程迄、見捨てられたかと思へば、誠に悔しう御座います。——妾、決して、出て行くからには、矢張、素裸體の身裝で出て參ります。ろんな事は何卒か御心配下さいますな。妾少つとも其樣な物は望みませんから——』、

言つて、今度は、極叮嚀に低首をしたかと思ふと、

『左樣なら、——御大切に。——』

と、繰り返へして、慕如、起上つて、表へ出やうとした。

ろの樣子が、餘りに變に受取られたので、

『お待ちなさい！』

言ひ樣、自分は、つと起上つて、彼女の袖を取り押えるが、早いか、

『貴方、一對、是れから何處へお出でになるお考えですか？』

『妾が何處へ行かうと、もう貴方に拘つたことぢやないでせう。妾、もう貴方に御

用事はないと思ひますから、早速御失禮致しますよ。――失禮！』

と、自分の手を振りちぎつて、よろ〳〵と表へ向つて、二、三歩。

然し自分は、直ぐに言つた。

『貴方にお金を上げませう。僕は、其麼薄情な男ぢや有りませんよ』。

すると、彼女は、蒼白い、物凄い顔を、ちらりと見せたが、髮振して、

『妾、妾のれ金丈けは、整然と持つて居りますよ。ろれ以外には些つとも必要が御座いませんよ』。

言ふなり、血走つた眼を以つて、きつと自分を睨めて、急いで、表の暗へ突き入つた。

（其二十二）

自分は、然乍ら其後を追うとする勇氣はなかつた。唯、入口に彳立つて、暗の路

次に消え行く彼女の姿を、凝つと見入つて、流石に一種暗愁の涙にかき暮れざるを得なかつた。

自分は、今、お密を離別した。何にも心置く處はないが、唯、其處に何か斯う言ひ得ない悲しい情が湧くのだ。――恐らく彼女の出て行き樣が、豫想以外であつたから、其處に同情の涙が湧くのであらう！

其晩、自分は、何となく眠れなかつた。

斯う言ふ具合にして、その後、自分は、又た元との孤獨の生涯に入つた。

今迄、二人暮しで居た者が、急に單獨な身になつて、非常に窮窟不便を感じるのであつたが、然し是れも運命のなす處だと觀念して、幾日かを過ぎた。

然し自分は、日に日に言はれぬ苦痛を持つて居た。と言ふのは、今迄――お密と結婚する以前――孤獨の生活を續けて、其寂寥の情に得堪えられないで、ある時、死なうと迄した身が、突然、お密と言ふ大なる慰籍者を得て、一時、その慰籍の光

りに浴して非常に滿足し、愉快を認めて居た。それが圖らずも這般の『離別』を惹起したので、勢ひ其處に二倍の苦痛を感ぜざるを得なかつた。

然し、苦痛の內にも、遂々二個月を經過した。――其間、舊學友とも往來を初め、又た同僚等とも親しく交際を結んだが、然し其後、自分は、別にある慰籍を求めることは如何しても出來なかつた。

自分は、今の社會の人情は、凡て輕薄だ。肝膽を排いて語る人は唯の一人だつて居ない。――斯歷社會に生存する價値があるであらうか？　なぞと自分ながら、自分の意識を疑つた。

要するに、人の此世に生を得て、一日もあらねばならない、求めねばならない、彼の慰籍の愉快の光りに觸れることが出來ないので、自然厭世主義に陷つたのである。

で、自分は、遂々厭世主義者になつて、何だか中央の大都會に生存することが厭

になつて、ある日、突然、故鄕へ歸る念が、油然と湧き起つた。

故鄕！　其處には、無論、慈愛深い父母は、既に冷めたい土となつて、現世にはさない。――さらば、その茸々たる墳塋の靑苔を眺めて、慰籍に浴するのか？

實際、人は斯う信じたかも知れない。

然矣。自分も亦、斯歷考えがないではなかつた、寧ろ大いにあつた。けれども猶それ以外にも自分の考えはあつた。

故鄕は、自分の產れた土地。大都會の煤煙に汚れた空氣に生活して居るよりは、遙かに舊知己であつて、又た空氣も餘程淸淨である。同じ苦痛の境に生存するのでも、少しでも苦痛の減るやうな、僅かでも慰籍を求め得られる場所に生活するが、自分の利益であらう。殊に、――今になつて初めて思ひ出したが、――その故鄕には、自分の筒井筒の友達がある、彼等は此大都會に生存してる、所謂今の友人等とは、多少友情の意義を異にしてる。――

都會と田舍と？――　如何しても田舍の方

が、自然である丈けそれ丈け、人情の上に『眞』が宿つてる！　されば偽り多い都會に居るよりも、故郷の地へ歸つた方が幾何好いか知れあしない。

山や、水や、花や、鳥や、野や、杜や、人情以外の自然界も、それは凡て我舊知己である。――定めし自分が、今、失意の身を持ち歸つたならば、我が故郷は、如何に自分を歡迎して呉れるであらう。

自分は、曾て、未だお密と結婚しない以前、塵の下宿の二階で月を見て泣いて悶まされたことがある。

自分は戀人と言ふのは、果して誰だ、何物であらう、人間であるか、植物であるか、鑛物であるか、但しは亦世の常に憧がれる天上の星斗であらうか？　否な〳〵斷じてそれ等の物でない。我が戀人は實に崇高な慰籍者、善道の指導者である。我、孤獨の寂寥に袖を濕ほす時、渠は勇剛なる光りを投げて、必らずわが弱き呼吸から復活せしむるのが常である。

あゝ吾が戀人。

卿の御姿は艶麗と言ふよりも寧ろ瀟洒、その華やかならぬ瀟洒の中には、言ひ得ない高き氣品と嵩高の極致とを藏むで居る。世の中に何が美しいと言つて、是れ程美しい物はなからう。

あゝ吾が戀人は完全な美人である。

自分は、十三の歳に孤兒になつて以來、知らぬ他國の空に遍歴の運命を載せて、今、熱塵吹き荒ぶ巷に果敢ない涙を呑む身の、ともすればこの世を厭ふ觀念に、行途の凡ての希望を、我と我身に思ひ消す時、遽然として我胸を射り、我を慰め、我に大なる鞭撻を與へらるのは、實に卿である。

進んで奮鬪の域に臨め。進んで敗れ、傷いて歸へれ。而して一敗を以つて一切を律すべからず。思へ汝の生涯は奮鬪に終はるべきなり。吾子皇々乎として戰に臨め。然らば其處に、汝が凡ての希望は期せずして成立せんものを。汝

の胸に美はしく高く輝ける理想の壁あり。若し汝、敗れ傷いて歸へりたる時、その四邊に嘲笑の聲を耳にするは、未だ汝が艱險の意義を解せざるの時なり。吁吾子戰へ。皇々乎として進みて戰へ。而して一敗を以て一切を律すべけんや。

あゝ吾が戀ふる完全の美人よ。われは卿によつて勵され、善導せられ、而して絶えず其處に無限の慰籍の光りの花を認め得るのである。

あゝ吾戀人。

自分は毎夕。むさくろしい、うら悲しい塵の下宿の二階に居て、漸次西の方に當つて昇り來る月影を眺めて、常に如上の感想にかられつ沈湎多時、其勇剛なる高さ、清さ、深さ、厚さ、大なる無言の慰籍の光りにふれて、奮然として振ひ起つのである。

あゝ我戀人。大なる月影よ。善導の指導者よ。自分は、卿を永久に愛する者である。

此月、此戀人。自分が故郷へ歸へればさつと大慈愛の權化を見らるゝであらう。故郷の父母の墳墓に行つて、仰いで月の悠久無限な光りに浴さうよ！

自分は、斯う思ひ立つた時、もう矢も楯も堪らなくなつて來て、急ひで荷物を引纏めて歸郷しやうとしたが、然し、何分官署の都合もある事なので、其晩は、辭職願書丈け認めて。眠りに就いた。

而して翌朝、起きがけを、顏も洗はずに官署へ車を飛ばして、その辭表書を呈出した。そして今思うて見ると、自分乍ら可笑しく感せられるが、その辭表の許可が下りないのに、もうすたゝと、荷物を引纏めて、新橋停車場から、故郷の備後の福山驛へと向つた。——車中、例の蘇東坡の一句を、口吟み乍ら——。

近別不改容
遠別淚胸霑
四咫相不見。

實與千里同、
人性無別離、
誰知恩愛重、

瀛車が、驛へ着く毎に、車掌が、妙にアクセントのある聲で、鈴を右手に、彼處此處と飛び廻つて居た。

（其二十三）

自分は、突然歸鄉した。

然し、故鄉は自分が豫想して居た如きものではなかつた。もう永年音信を絶つて居た親戚は、何故にか、自分を殆んど惡魔のやうに言つた。

筒井筒の友達も、一人は米國へ、一人は滿洲へ、一人は東京の醫科大學へ行つて居て、肝膽を排いて語るべき友達は、眞一人も殘つて居なかつた。――で、自分は

非常に失望した。

然乍ら、折角歸鄉し乍ら、直ぐ又た何處へか飛び出さうと言ふにも、然う澤山の貯金はなし、失望の極、胸は何物をも燒き盡さむ如き感情にかられて居たが、なく〳〵故鄉の地に止つて、何か生活の方法を發見すやうなことになつた。――その內には、何か慰籍の光明に接することも出來やうと言ふので――。

すると運命と言ふものは妙なもので、それから十日と經たない內に、一友人が、突如、自分の貸長家の門を訪れて言つた。

『君、中學へ語學の敎師に出る氣はないかね？』

『ん、それは棚から牡丹餅だ。實は今口がなくつて弱つてる處だつた。何卒か紹介して呉れ給へ』。

言つて、乃でその友人に、自分の胸の內を全然打明けると、友人は早速奔走の勞を執つて呉れて、希望通り、自分は淺學の身も恥ぢず福山中學の敎鞭を執るの光榮

に浴したのは、正にそれから一週間後のことであつた。（自分は、その友人の名前は特に秘して置く）。

斯くて自分は、教員生活を一個月許り續けたが、その時、又た不思議な出來事に接した。他でもない自分を養子に貰ひ度いと云ふ家が出來た。

先方は如何な家かと、尋ねて見ると、意外、きみ子と言つて、それは矢張、自分の筒井筒の女の友達であつた。父祖傳來の財産はあるし、それに本人のきみ子が切に自分をと望んで居ると言ふことなので、自分は、一も二もなく承諾しやうとしたが、然し、一度結婚の苦がい經驗を歴て居る自分は、流石に一考を煩はした。

先づ最初、念頭に浮かんだのが新井白石の言葉、『粉糠三合持てば養子に行くな』であつたが、然し大なる『愛』の前には、其麼細しやかな言葉なぞ干渉すべきでないと、直ぐ然う思ひ返へした。

次ぎに思ひ浮んだのが、もう永年顔を見合せないきみ子が、今、現に自分に對し

て、どれ程の程度の『愛』を持つて居るか？　そして又た『自分を切に』。と言ふ言葉は、全く本人の口をついたものであるか、如何か。

斯う言ふ事であつたが、然し斯う言ふことは、單に自分の推測や、想像のみで、可否することは、到底出來ないので、乃で、自分はその婚結申込の返事を一週間待つて貰ふことにした

そして其間に、赤心きみ子の近來の擧動と、及び自分に對する意中とを、巧に手を廻らして探偵した結果は、

一、近來の擧動は、最も謹粛にして、或は憂鬱性に罹らんやの疑念を抱かるゝ迄なり。

二、附添ひの下女をして探らしむれば、きみ子嬢曰く『妾、もう社頭さんは幼少い時の何であるし、社頭さん以外には、誰とも結婚したくないわ。だから今迄の結婚は、阿父様も、阿母様も種々言うて喝かしなすつたけれど、しなか

つたの。妾、社頭さんでなくちゃ不可ないよ！。

言ふのであつた。斯う言ふ好結果であるが、然し自分は、渠女きみ子の言ふ處を疑はざるを得なかつた。

と言ふのは、自分は、元來十三の年に孤兒になつたので、そしてその後の運命は、種々遷變したが、（前に述べた如く）もう自分は、その十三の歳から、彼女と行逢つたことさへないのである。然るに彼女が、斯樣な胸中を持つて居ると言ふのは、如何も可笑しいと言ふより、不思議な位だ。

然し事實は、飽迄事實である。自分の探偵に差使つた人は、元より忠實な、正直な、信兇するに足るべき人であつたので、疑念を抱くことは抱いたが、然し直ぐ消え失せた。そして自分は、現在の妻、きみ子と結婚の式を擧げるのであつた。

此時、自分はその失意から、甦つたやうな氣がしたが、然し間もなくきみ子の一家は落魄した。

媒介人も、自分も些つとも知らなかつたが、冬の月、窓の障子に、搓冴たる梅の枯枝を映した夜半が明けて、庭には一滿の大霜の朝、唐如、差押人が、どや〳〵と這入つて來た。豈圖らん哉、大きな家作は最早やそのずつと以前に人手に渡つて居たのである。乃で驚いたのは、自分を初め、きみ子、下女、媒介人等であつた。

で、それ程の落魄に陷つた原因はと言へば、きみ子の父親、本田邦之進は、近年切りに米相場へ手を出して居たのださうで、普通の借財を負うたのならば、さうもろく一時に行くのではなかつたらうが……何か徐ろに一策を廻らす手段もあつたのであらうが、如何も致方のないことだ。

で、自分は、一時に兩親迄得て、極めて幸福な生涯へ入つて、嬉しいと思ふ間もなく、又た薄倖なる運命の襲ふ處となつた。——自分は、其時實は、斯く迄も自分は薄運な生れかと思ふて泣いたのである。

然し唯、幸福な事には、きみ子が自分を慕う情は、なか〳〵お密處の及ぶ處では

なかつた。それは非常に慕うて呉れた。從つて自分も亦非常に彼女を愛した。愛して慕うた。其處に目に見ねざる圓滿の花が咲いて居た。

で、話は元へ歸つて、本田一家は、もう滅茶々々に潰れたのである。昨日迄は、門前に華やかな馬車を繫いだ者、今日は、もう雀に與へる一粒の米がないと言つた風情であつた。

それに本田父母の言はれるには、斯麼醜い失敗をしては、到底も此福山の地の人々には顏合せが出來ないから、何でも東京か、大阪邊りへ行かう。行つて、何卒か眞面目に生活しやうぢやないか。然うして呉れ。俺等の恃みだと言はれるので、乃で自分は、再び、見捨てた東京へ上らなければならない運命を荷うに至つた。

斯くて自分は、一家を携えて、現在の松住町の家へやつて來た。そして自分は、元の參謀本部へ這入つた。

當時の義理の兩親が、不自由を感ぜられた度合は、到底今言ひ現はすことは出來

ないが、それは其筈である。もうずつと祖先傳來の家督があつて、生涯遊んで食つても拘はない程であつたのが、見る〳〵、月、僅か三十圓足らずの自分の月給で、一家四人、生活して行かなければならなくなつたのだもの——。

自分等一家は、斯麼世智辛らい生活をして居る內、義父母は病魔に襲はれた。もう兩親とも元來內氣な方であつたものだから、一家の落魄が、今更のやうに苦になつて、恐らくそれが病氣の原因を作つたのであらう。然し何と言ふ天災が引續くのであらう。自分の運命の無情な權威を呪ふこと其極度に達した。

然し自分が、どれ程運命に向つて、慨の氣を吐いた處で、義父母及び一家の幸福安全を期待することは出來ない。否や、全く出來なかつた。

自分等は、その僅かな月給の中から、兩親の藥價を特に多く支出して、有名な醫學博士の診察を受けたり、藥を服用したりすることに努め勵んだが、遂に何の効能

もなかつた。

父は、病床に就いてから、一ケ月足らず二十九日間して、永眠した。母、きみ子、及び自分の悲嘆は言ふべからざるものであつたが、その葬式をいとなんで、はと一息吐くか、吐かないかと言ふ間、今度は、亦母が永眠された。

さあ、自分と、きみ子との悲しみは、到底その極點に達したのである。未だ父上のなくなられた時は、然うでもなかつたきみ子が、もう冷え切つた大理石のやうな、母上の御手に泣き縋つて、

『阿母様！　阿母様！』

と、力限り靈喚ふのである。

然しその閉ぢられた眼、閉ぢられた口は、二度開らななかつた。――自分もはら〳〵と不覺の涙を溢した。

（其二十四）

父の葬式は、幸ひ天候が好かつたが、母の葬式の日は、どんよりと秋の空が、頭上近くに垂れ下つて、今にも降り出しさう。さらでも胸は、悲しみに滿ちて居るのに、猶其上、天氣の心配をし乍ら、やつとの事で取り濟した。墓所は、兩親とも、同じ信宗と云ふので、下谷の萬年寺にした。

で、自分は、是非茲で、直ぐ告白しなければならないのは、其麼葬式の費用である。僅か月給三十圓足らずの中で、四十圓五十圓の費用が、如何して出せやう筈がない。――自分は實際其樣な費用を、借受け難くい中から、強ひて負債したのである。知己から知己を求めてやつとの事で。

で、兎に角、葬式はそれで濟んだが、又た茲に出來事が出態した。――他でもない、妻のきみ子が、其月丁度産月となつて居た。――もう自分の貧苦に責められる〻

こと、茲に至つて、其頂點に達したのである。

かう言ふ具合にして、自分は悲しみの内に、嬰兒の分娩と言ふことを幻に畫き乍ら、其後八日を經過した。

その九日目のこと、自分は、今迄、父の危篤だとか、葬式だとか、又た引續いて母の危篤、不幸に接して、其間絶えず特別休暇を願つて居たものから、ろう何時迄も遊んで居て月給を頂戴することの、甚だ心苦しくて堪らないので、久振で、官署へ出勤して歸へつて來ると、驚いた。

妻は、奥の間でうん〳〵と呻き立てゝるのではないか？

『如何した。お腹が痛むのか？　子が產れるのぢやないか？』

と、慕如、かけ込んで、傍へ寄り添うて、お腹を撫でん許にして訊けば、彼女は餘程苦しいと見えて、唯、首肯いて我と我手にお腹を抱えて、それでも、

『早く！　早く！　して頂戴な！』

と、何の事か分らないけれど、苦氣な中から叫ぶ。

『ん。何だ。子供が出るのか？　如何したのだ』。

言つて、聞けば、

『早く！　早く！』

と同じことを言ふ。

自分は、もう氣が氣ではなく、もう夢中になつて、

『如何した。子供が產れるのだな。よし！　僕がこれから直ぐ產婆へ駈け付けるからちなあ。それ迄辛棒するんだ、好いか？　好いか？』

妻の横顏を差覗いて言ふと、

『え――』。

と、かすかに言ふので、急いで駈け出さうとすると、

『阿夫？　阿夫？　妾、もう辛棒出來ませんわ！　あッ痛たゝた！』

自分は、もう後をふり顧さもせず、かねて心覺をして置いた、自分の家を出ると、すぐその角を右に折れて、又た直ぐその初めての筋を左へ曲つた、その二軒目、もう看板がすゝ黑くなつて居る甲子戸の家、其處へ向つて一生懸命かけ付けた。

自分が、大急ぎで、產婆（と言つてもさう老人ではない）を呼び迎えて、來た時には、不思議、妻はもう油紙の上へ、むく〳〵とした愛女を分娩して居たのであつた。

（其二十五）

かくて自分は、今現に、嬰兒春枝が發育するに連れて、月々負債が減つて行きつゝあるのである。

自分は、言ふのを忘れて居たが、これより先き、自分は、義父母の病中以來、官署から歸途、例の電車停留柱の處で、よくお密を見た。

今、思うて見ると、れ密は、以前のれ密とは餘程異つて居たので。うれで遂ひその當時は氣着かなかつたものらしい。

以前のお密は、前に言つた通り、顏が餘程空想的で、一見晴々しい感じを與へるのであつたが、電留柱の邊を往來して居たお密は、餘程凄慘な表情に變つて居た。

それは美人は、なる程美人には相違なかつたが、然し、土方工夫の妻になつて居る位だから、風采とみに一變して、自分には少つとも氣着かなかつたのである。

然し新聞紙が、詳細な報道をしてから、それに依つて、よく思ひ合せて見ると、彼女お密は、髮を丸髷に結つて、双子縞の綿入に同じ縞の裕衣羽織を着て、歩く表子に、ほろ〳〵と赤の下卷が溢れる。——顏は、勿論蒼白めて居て、そして髮は絶えず亂れ勝ちの後毛ばら〳〵、その細い首筋の邊りを、風にふさいなまれて、亂次藻泥にもつれかゝつて居た。それに年齡がなか〳〵廿臺とは、如何しても見受けられなかつたのである。

自分が、前の戀人を見損つたと言ふも、全くかく非常な變遷を見せて居たからであらうと思ふ。

然し、新聞紙の詳細な報道は、何だか自分にお密刺殺罪を宣告したかのやうに思はれるのである。

と言ふのは、前にも言つた如く、れ密は自分を戀ひ慕うて、否や、自分に行逢んが爲めに、このやうに、風の吹き荒ぶ日も、雨の降る日も一樣に、堀邊を往來して居たので、うれが圖らずも彼女の現在の夫、石渡金之助の猜疑を買ふ處となつて、遂に這般の刺殺椿事に至らしめたのである。

そのお密をして、かく堀邊を彷徨はせなかつたならば、彼女は或は、刺殺されたのではなからう。否や確かに刺殺されるやうな事はなかつたのである。

して見れば、自分、此社頭由二郎は、下手人以上の罪惡を犯して居るものに相違ない。

（其二十六）

然し自分の、今、不審に思ふのは、れ密が何故簑折歳二との關係を、自ら明かに、此自分に向つて、申立てゝ呉れなかつたのであらう。――自分は、お密が何故石渡と夫婦になつた、其原因を今に知らない！

斯う思ふと、自分は、此『刺殺』の罪惡が、亦一部分は、れ密、それ自身に在ることの如く信ずる！

それ人の本性は善である！　れ密が、かの自分に宛てた手紙を懷にして、年を越えて、一日の如く、堀邊をさ迷うたと言ふのを以つて見れば、如何しても、うの手紙の文句が虚僞とは思はれない、否なしか思ふべき餘地がないではないか？

自分は、手紙の文句が、簡單である丈け、それ丈け多く彼女の爲めに、同情し、謝罪し、且自分の爲めに悲しまざるを得ないのである！

然し、自分の今、別に思ふには、悠久から悠久へと流れ去る時間と、又た人類の集合團体たる社會とは、彼女お密の半面を知らずに、その永久に默過するのであらう。

今、神は、地下のお密の靈魂とか、地上の自分の肉體とを、ある見る事の出來ない鐵鎖もて、最も密接に連結せしめ給ふたのではなからうか？

自分は、きみ子が持ち運んで來た膳上へ、不圖お密の生きた幼象を畫いて、ぞつと戰慄するのであつた！

＊　＊　＊　＊　＊　＊

その晩、自分は、現在の妻きみ子に、自分の過去の暗黑歷史を物語つた。

そしてその翌朝、自分は、特にきみ子の承諾を經て、又たかの春枝の玩具費用を轉用して、兎に角、苦しい中から金五圓を、お密の葬式費用の一部分へ、匿名で寄贈した。

自分の捨てたる戀人よ。希くは地下に瞑せ！

＊　＊　＊　＊　＊　＊

家庭小說 **捨てたる戀** 終

明治四十年六月[illegible]日印刷
明治四十年六月[illegible]日發行

著作者　草の人
發行者　岩崎鐵次郎　東京市神田區鍋町二十一番地
印刷者　木村榮吉　東京市京橋區采女町十番地
印刷所　文英社　東京市京橋區采女町九番地

著作權所有

【捨てたる戀】
※【正價　金貳拾五錢】※

發賣元　大學館
東京市神田區鍋町廿一番地
電話本局三〇六七番
振替貯金口座番號四五一七